戦前期　留日医薬学生の帰国後の活動と現代中国における評価
―　千葉医学専門学校・千葉医科大学中国留学生の事例　―

見城　悌治

要旨

千葉医学専門学校・千葉医科大学は、戦前期に中国からの留学生を多く受け入れてきたが、卒業生たちの帰国後の活動については不明な点が多かった。

本稿では、中国側の刊行物を用い、千葉医専・医大の卒業生が、近代医学校の教員や政府行政職に就くなど、中華民国・中華人民共和国に様々な貢献をし、何名かについては、現在も高い評価を与えられていることを明らかにした。

はじめに

今日の日本で学ぶ留学生の６割（約８万人）が、中国学生であることは周知の通りである（1）。一方、明治末から昭和戦時期にかけても、中国留学生の数は多かった。近年の留学生史研究では、①分析対象となる留学生が多様化し、文系だけでなく理系や軍事系留学生も扱われてきた、②帰国後の活動についても視野に入ってきた、③1949 年以降も研究対象となってきた、④戦時下の留学生研究は手薄である等（2）の動向が指摘されているが、魯迅のように名をなした文学者等の研究を除くと、留学生の日本経験や帰国後の動向についての調査研究は、必ずしも盛んとは言えない。

筆者は、本紀要前号において、「明治～昭和期における千葉医学専門学校・千葉医科大学留学生の動向」（3）（以下、「旧稿」と略記）を著し、千葉大学医学部・薬学部の前身にあたる同校に在籍した中国・朝鮮・台湾留学生の名簿を作成し、また辛亥革命時における紅十字隊による救護活動、帰国後の社会的活動、たとえば彼らが設立した近代的医学校の概要などについて、日本側の資料に基づいて紹介した。また同稿を元にして、「千葉」という場での留学生活の諸相などを加筆した『近代の千葉と中国留学生たち』（4）もまとめた。

この両著では日本敗戦後の卒業生たちの動向や現代中国における彼らに対する評価に言及することはできなかったが、その後、中国で史料調査をする機会を得た結果、ある程度の叙述を可能とするデータを集めることができた。全体的体系的叙述には至らないが、本稿でその概要紹介を試みることで、旧稿の続編の意味も持たせたいと考えている。

以下、１～２章では、現代中国の出版物中に看取できる千葉医専卒業生の評価を紹介する。１章では「人物事典」等を、２章では一般出版物を対象とし、さらに『人民日報』紙上の記事に卒業生が登場した場合も適宜加えた。３章では、彼らが中国で出版した医学書等を示し、いくつかの書については内容の一部を挙げる。さらに、４章では、中国で発行されている「近代中国医薬学史」の叙述中に見える千葉医専（ＯＢ）の役割を紹介していく。また、末尾には、旧稿の「補遺」を付け、その補足や修正をしていくこととする。

これらの作業によって、狭くは千葉大学の歴史研究に、広くは日中文化交流史あるいは留学生史研究の全体像構築に、多少とも資することを本稿の目的としたい。

1　現代中国の「人物事典」等に掲載されている千葉医専・医科大卒業生たち

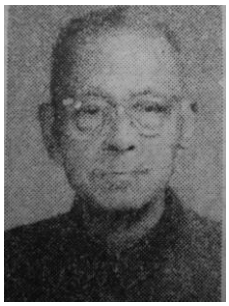
現代中国で発刊されている「人名事典」等に、千葉医専・千葉医大卒業生（中退生を含む）の名前を複数発見することができる（5）。そこで、まず本章では、13 種の資料類から看取できた 10 名（一覧は次々頁に掲載）の経歴や現代中国における評価についてまとめていく（なお、それぞれの「評価」に応じて、記述量に差があるため、筆者の叙述にも多寡が生じている）。

また、現代中国における人物評価という観点からは、『人民日報』紙上での論評も気になるところである。中国の上海図書館には、1946 年から 2006 年までの『人民日報』の記事検索がＰＣ上でできるデータベースが収められている。よって、ここに卒業生・中退生が載せられていた場合は、同紙掲載記事の概要も加えていくこととする。

なお、以下の文章中で人物名の後に付す数字（【Ｘ】）は、見城旧稿に掲載した千葉医専・医大入学者名簿における通し番号である。便宜のため、本稿でも継続して使用する。

1）侯毓汶（侯希民）【7】

写１千葉医専アルバム



写２『中国人名大詞典』

1882～1974 年。江蘇省無錫生まれ。1904 年千葉医学専門学校入学、08 年卒業（6）。ハルピン防疫総局主任、奉天高等医学堂教務長、南京陸軍医院院長、天津市衛生局、北平市衛生局局長等を歴任。中華医薬学会会長にも就いている。

1941 年に、千葉医科大学から医学博士号を授与されている。また戦時下においては、「華北政務委員会」農務総署署長等を歴任した。

新中国においては、平原省（7）衛生局顧問、平原省医科学校副校長、保定医学専科学校副校長などを務めた。その結果、「長きにわたり、中等衛生医学教育に従事し、基礎的な衛生学の知識を持った若者の教育に貢献した」との評価が与えられている（8）。

2）方擎（方石珊）【20】

写３『中国人名大詞典』

1884～1968 年。福建省福州生まれ。孤児として養母によって育てられた。生活のため、薬局兼診療所で働いていたが、勉強を怠ることなく、日本への官費留学試験に合格した。そして、1906 年、千葉医学専門学校に入学、10 年卒業する。在学中は、医学校仲間とともに発行した雑誌『医薬学報』の主筆を務めた（9）。一方、在学中の留日仲間たちの多くは、革命を目指す中国同盟会に入る者が少なくなかった。従兄弟である方声洞（後述）、方声涛なども加盟し、方擎も参加したいと

考えたが、一人っ子であるため思い留まり、勉学に集中したと言う。

1912 年に南京臨時政府陸軍部軍医局局長に就き、また北京政府陸軍部軍医司司長、中央防疫処処長など歴任。ハルピンでペストが流行した際には、その予防活動に従事した。また北京医学専門学校教授にもなっている。1916 年、北京に首善病院を創設し、院長と内科主任となる。のち、北京大学医学院公共衛生系主任、北京師範大学講師も兼任。

日中戦争時には、日本語が堪能なことから日本軍の協力要請を受けたが、拒否した（10）。

新中国誕生後は、中華医学会の総幹事、副会長を歴任、また中央防疫委員会、中国紅十字会、北京防癆（結核）委員会でも重要な役割を果たした。北京衛生局顧問、中国パキスタン友好協会副会長などにも就いている。しかし、新中国建設に貢献してきた仲間ともども、文化大革命の時期に批判されたことに対し、抗議の自殺を遂げた。

なお、方には７名の子息がいたが、それぞれ大学教員などに就いている。

方擎の一生について、ある評伝は「苦学して名医になった。人を助けるのを喜びとし、目先の利益に捉われず、権力を恐れなかった。若い時、日本から先進西洋医学技術を導入し、薬局と医院を設立し、人を助けた。公共衛生の促進に生涯を捧げた。その功績は極めて偉大である。しかし、前例のない文革の悲劇の中で、怨みを飲んで生涯を終えた。しかし、人の心に真理はある。彼の精神は長く生き続けるだろう。近年の中国では政治、経済と共に医療と公共衛生の方面の事業も著しい進歩がある。これを見て、方先生の魂も慰められるだろう」（11）とまとめている。

〈『人民日報』紙にみる方石珊〉

方は、新中国において、医学界のリーダーとして政治的にも重要なポストについていたため、『人民日報』の 1950 年から 66 年にかけ、105 件も彼の名前を見つけることができる。これは、筆者が調査した千葉医専関係者の中で、最大の数となる。以下、その主要な記事と概略を紹介したい。

まず、1950 年５月、「アメリカ帝国主義」への対抗を意図する「中国人民救済代表会議」の代表団の一人にその名前があり、朝鮮戦争（1950 年６月勃発）で、アメリカが細菌戦を展開する可能性について、「中華医学会主席」あるいは「北京医薬衛生界抗美（米）援朝聯合委員会主任委員」の立場で、懸念を表明した。実際に朝鮮に調査団メンバーとして赴くこともしている。戦争停戦後も、核兵器廃絶に反対する記事中に、方の名前を見つけることができる。

1953 年５月にオーストリアで開かれた「世界医学会議」には、中国代表団団長として出席し、医学者の立場からの世界平和実現を呼び掛けている。また、北欧諸国やパキスタンなどの外交使節が中国を訪問した際、医学界の代表として歓迎式典等に出席している記事も多い。中国パキスタン友好協会副会長にも就いたことは、既に触れた通りである。

日本との関係では、1955 年 11 月に、日本医学代表団（名誉団長阿部勝馬：慶応大）、団長

現代中国発行の事典類における千葉医専関係者の評価

	掲載書籍名	評価の視座	1	2	3	4
	（氏名）		侯毓汶（希民）（7）	方擎（石珊）（20）	方声洞（27）	王頴（56）
	（生没年）		1882～1974	1884～1968	1886～1911	1889～1977
	（卒業年）		1908年卒	1909年卒	1911年中退	1911年中退？
	（略歴等）		北洋軍医学校教授、北京市衛生局長ほか	北京医学専門学校教授ほか	辛亥革命烈士	方声洞夫人
1	中国社会科学院近代史研究所編『民国人物伝』1978～96	中華民国時期の知名人士			○（第4巻）	
2	李新、任一民『辛亥革命時期的歴史人物』1983	革命烈士			○（為国損躯烈士）	
3	李向明『中国現代医学家伝略』1984	医学者				
4	趙矢元『中国近代愛国者百人伝』1985	革命烈士			○	
5	崔月黎『中国当代医学家薈萃』第１巻、1987	医学者				
6	徐友春『民国人物大辞典』1991	中華民国時期の知名人士	○	○	○	
7	劉継増・張葆華『中国国民党名人録』1991	国民党名士			○	
8	『中国人名大詞典：当代人物巻』1992	現代中国の名士	○	○		
9	周棉『中国留学生大辞典』1996	元留学生			○	○
10	徐天民編『北京医科大学人物志』1997	北京医科大関係者				
11	鄭鉄涛・程之苑編『中国医学通史（近代巻）』医学人物項2000	近代中国の代表的医家				
12	劉国銘編『中国国民党百年人物全書』2005	国民党名士			○	
13	中国薬学会編『中国薬学会史』2008	中国薬学会の名士				

5	6	7	8	9	10
喩培倫（59）	呉祥鳳（64）	金宝善（122）	劉文超（歩青）（146）	趙師震（192）	張錫祺（207）
1886～1911	1888～1956	1893～1984	1891～?	1899～？	1898～1960
1911年中退	1915年卒	1918年卒	1918年卒	1924年卒	1925年中退
辛亥革命烈士	北平大学医学院院長ほか	北京医科大学教授ほか	上海東南医学院教授ほか	上海東南医学院教授ほか	上海東南医学院、安徽医科大学教授ほか
○（第１巻）		○（第8巻）			
○（黄花崗烈士）					
		○（医務界的先輩、公共衛生学専家）			
○					
		○（公共衛生学家）			○（眼科専家）
○		○		○	○
○					
		○			○
		○			○
	○（1932～37年　院長）	○（1954年　教授）			
		○			
○		○			○
			○		

堂森芳夫：衆議院議員）が北京を訪れた際、中国科学院院長・郭沫若、中国人民保衛世界和平委員会副主席・廖承志とともに、「中華医学会副理事長」の立場で接見している。

1963 年 10 月、中国日本友好協会が北京で成立し、日本側からは、石橋湛山、鈴木一雄（日中貿易促進会責任者）、宮崎世民（日中友好協会理事長、宮崎滔天甥）、大西良慶（清水寺住職）、西園寺公一（日中文化交流理事、西園寺公望孫）らが出席した。中国側は名誉会長に郭沫若、会長に廖承志が就いたが、方もこの設立大会に出席していた。

以上、方擎（方石珊）は、新中国における医学界の代表として、平和運動に発言し、また世界会議にも多く関わっていた。さらに、訪中した国賓の歓迎会に臨席することも多いなど、中国の「医家代表」として、国際交流の場でも多くの役割を果たしていたようである。つまり、新中国に対し、大きな貢献をしていたことは自他ともに認めるところだったろう。にもかかわらず、文革期に批判を浴び、自死を選ばざるを得なかったところに、彼の矜持また屈辱と失望を察することができるのである。

3） 方声洞【27】

1886～1911 年。福建省侯官（今の福州市）出まれ。運輸業に携わっていた父は、開明的な思想を持っていたため、自分の子どもを次々に日本留学させた。声洞も 1902 年、兄姉に従い、渡日した。まず、東京の成城学校に入り、軍事学を学んだ。1904 年に起こった日露戦争をめぐっては、ロシアと日本に翻弄される清朝に不満を満ち、1905 年 8 月、孫文が東京で同盟会を創設した際、声洞は、兄、姉、二人の兄嫁とともに、参加した。

写 4　『中国人名大詞典』

清朝政府は、私費留学生が革命勢力に寄与することを恐れ、彼らが軍事学を専門にすることを禁止した。声洞は、失望したが、国に何らかの貢献をするために、千葉医学専門学校に入学する。1906 年のことであった。

千葉の医学生として、方声洞は熱心に勉強を重ねたが、特に病理学の研究に詳しかったと言う（[12]）。他方、秘密裏に革命活動に従事した。また中国留学生総代表、同郷会議事部長、同盟会福建支部部長などの職務も担当していた。

1911 年初め、同盟会が広州蜂起の準備をしている知らせが、日本の声洞にも届いた。声洞は、仲間に「私は才能が全然ないけれど、医学を数年学び、その心得は少しある。蜂起が始まった後、軍医が居なければならない。ましてや、私はすでに革命に貢献することを志した。いまこうした機会があって、どうして私に参加をさせないことがあるだろうか」と述べたという。

当初は、日本に残り、後方支援の役割を担うはずだったが、参加への意志を強く示した。卒業を 7 月に予定していたものの、3 月に千葉医専に休学届を出し、中国へ向かった。そして 4 月 27 日、辛亥革命のリーダーの一人・黄興の指揮下で、広州で蜂起したが、そこで犠牲になった。享年 26 歳。この知らせを聞いた千葉医専校長の荻生録造は、「惜しい人物を

喪った」と嘆いたと伝えられる。

のち、この時に亡くなった同志とともに黄花崗に合葬され、「黄花崗七十二烈士」として、現在も顕彰されている（[13]）。

4） 王頴【56】

1889～1977 年。福建省福州生まれ。方声洞夫人。1908 年、声洞と結婚。夫に従い、日本に渡った。1909 年同盟会に入る。1910 年、長男の賢旭（[14]）を出産後、千葉医学専門学校生となり、産科を学んだと言う（[15]）。

王頴は、声洞が 1911 年に広州蜂起に参加するため帰国し、千葉に一人残された時の心境を、後にこう書いている。「私はただ一人千葉に残った。孤独で寂しく、不安な気持ちに溢れ、寝食もよく取れなかった。深夜には道路で酔っ払いがすさまじい大声を挙げるのが聞こえ、私を一層心細くさせた」（[16]）。

声洞の死後、帰国。1914 年、慈恵産科医学校を卒業後、北京の首善病院産科主任となる。事後、産科医師に専従する。声洞が「我が国の貧しい婦女が生育のために死んでしまうことが非常に多い。将来、学問を成就し、帰国した時には自分の医院を創るべきである。貧しい婦女のために尽くすべきである」と言っていた遺志を大切にした所以と言う。

1928 年、体が弱かった弟を病気で亡くし、また老母の世話をするため、自宅で開業した。そして資金を集め、声洞を記念する産科病院を創設しようと奔走するが、資金不足により、設立できなかった（[17]）。

〈『人民日報』紙にみる王頴と方声洞〉

1961 年 10 月、辛亥革命 50 年を記念して、『辛亥革命回憶録』第一集が発刊された。『人民日報』（同年 10 月 8 日付）には、同書中に、方声洞夫人である王頴が「憶声洞」という原稿を寄せたこと、その内容は「近親者の立場から、革命先導者の人物像と革命家の日常行動について、丁寧に描かれ、人を感動させるものである」との紹介記事が見える。さらに同年 10 月 9 日付には、「首都今日挙行辛亥革命紀念大会」の記事が載り、そこで、王頴など革命を経験した「老人たちが熱心な座談を行った」と伝えられた。

1963 年 3 月には、「黄花崗七十二烈士殉難五十二周年」の式典が広州で行われ、ここでも王頴は座談会に参加している（3 月 30 日付）。また、「孫中山誕辰百周年記念準備委員会委員」271 名の一人にも選ばれている（1965 年 10 月 25 日付）。

また、1951 年 10 月 27 日付け「全国婦女一年来抗美（米）援朝運動中的貢献」の記事中で、中国や朝鮮の人民戦士を支える「模範的女性医務従事者」としても、王は登場する。

王頴は、辛亥革命の先導者となった烈士・方声洞の妻として、その歴史顕彰の場面で声洞を想起させる役目を担っていたこと、また王頴自身も新中国で、医師として貢献していたことが分かるのである。

5） 喩培倫【59】

1886～1911 年。四川省内江の生まれ。子どもの頃は歴史故事を好んだが、のち機械に興味を持ちはじめる。

1905 年. 弟とともに日本留学をし、最初は、東京で警監の勉強をし、のち大阪高等工業学校に進んだ。1908 年夏、東京で中国同盟会に参加。清朝打倒運動に積極的に関わるようになる。

写 5　『中国人名大詞典』

革命遂行のためには、爆弾製造技術も必要と考えた喩は、千葉医学専門学校薬学科に転学して、化学の研究をした。爆弾の製造中、ケガをしたこともあるが、最終的には製造法を完成させた。

清朝打倒を果たすため、1911 年 4 月 27 日の広州蜂起に、自らが製造した爆弾を持って参加。しかし、清朝軍に捕捉され、のち処刑された。方声洞と同じ、黄花崗に埋葬され、英雄とされている [18]。

〈『人民日報』紙にみる喩培倫〉

1990 年 5 月 3 日付けに掲載された「黄花崗壮士・饒国梁」は、「黄花崗七十二烈士」の一人であった饒を紹介する記事だが、広州での蜂起の際、同じグループにいた喩の略歴についても比較的詳しく紹介されている。

6） 呉祥鳳【64】

1886～1956 年。浙江省嘉興市出身。1909 年千葉医学専門学校入学。在学中の 11 年、辛亥革命紅十字隊に参加。日本に戻った後、1915 年に卒業。1917 年 4 月国立北京医学専門学校内科教授に招聘される。1919 年 10 月から 1921 年 9 月まで、米国ジョンポプキンス大学で研修。

1927 年 9 月、国立北平大学医学院附属院長になり、同時に北平協和医学院兼職教授となる。1930 年、北平で猩紅熱が流行した際、豊富な経験と高度な医療技術を発揮し、医学生と患者に評価された。また医療と看護業務を機能化するための病院機構改革にも手腕を発揮したとされる。1932 年 8 月～37 年 9 月の間には、北平大学医学院の院長を務めた。

写 6『北京医科大学人物志』

1933 年 3 月、日本軍が華北に迫り、古北口で激戦をした時、彼は北京において、軍事委員会北平分会と人民自衛指導委員会と連合して、重傷者の治療にあたった（のち政府表彰を受ける）。

日中戦争勃発後、彼は一部の教師を連れて西安に赴き、西北臨時大学医学院の建設に参加した。勝利後は、南通医学院に招かれた。内科学、精神病学の専門家で、孫文が 1925 年、病に倒れた際、治療にも当たったともされる。[19]

7）金宝善【122】

1893～1984 年。浙江省紹興生まれ。貧しい家庭に生まれる。1907 年入学した紹興中学堂で、魯迅にドイツ語などの指導を受ける。新文化運動の伸展と魯迅の直接的影響の下、金は当時の学内外の民主革命運動に積極的に参加した。また魯迅の小説中に、辮髪を切る学生としても登場するとされる（[20]）。中学校卒業後、南京水師学堂、また杭州医科専門学校に転入し、医学の学習を続けた。

写７　千葉医専アルバム

写８　『中国人名大詞典』

1911 年、官費の日本留学者として、日本に渡り、日本語修学の後、1914 年、千葉医学専門学校に入学した。そこでは、主に内科学を修めた。1916 年に卒業後、東京帝国大学伝染病研究所に入り、伝染病学と生物製品の製造技術を専攻した。18 年に修了し、1919 年に帰国した。

帰国後、北洋政府内務部所属中央防疫処の技師となり、ペスト等の防疫作業に従事した。1925 年から、北京医学専門学校および北京軍医学校において、伝染病学と防疫学を講義し、衛生防疫の人材養成に貢献した。1926～27 年、米国ポプキンス大学に留学し、公共衛生学を学んだ。帰国後は、杭州市衛生局局長、さらに南京国民政府衛生部の保健司司長に就いた。1934 年から 1941 年まで中華医学会会長を二期務めた。日中戦争期は、中央衛生署署長として、日本の細菌作戦などに対し、防疫や衛生行政に奔走した。

戦後は、国民政府の衛生部政務次長となった。欧米に派遣され、各国衛生政策の調査とするとともに、ジュネーブでＷＨＯが創設された時、中国代表として発起人の一人になった。帰国後、衛生行政の改革に努めようとしたものの、国民政府がその建言を入れることなかったため、失望し、1948 年春に辞職。上海医学院衛生学系教授に一時就いたが、同年 9 月、家族とともに、米国に渡り、連合国善後救済総署児童救急基金会医務総顧問となった。

1949 年、新中国が誕生した際、金は大変よろこび、米国で新中国のための募金集めに奔走した。1950 年、中国政府から帰国要請を受けた金は、友人たちの反対を押し切り、1951 年 2 月に帰国した。

母国に戻った金は、衛生部技術室主任、参事室主任を歴任した後、1954 年 4 月、北京医学院衛生学系主任兼保健組織学教授となる。同年 12 月、第二期全国政治協商会議委員に当選。中国紅十字会常務理事や『中華衛生雑誌』主編を兼任した。また金が中心になって中華医学会衛生学会を作り、同会第一期主任委員、中国科普協会委員などの職に任ぜられた。

ところが、1957 年、金は右派のレッテルを貼られ、一切の職務を追われた。1960 年に名誉回復した後、北京医学院で英語や日本語教育にあたり、さらに英・独・仏・露語の衛生科学技術情報資料の翻訳事業に従事した。

「文化大革命」のさなかには、再度攻撃を受け、辛酸を味わったが、名誉回復を得た後、

全国政協委員に当選、併せて北京医学院衛生系名誉主任に任命された。最晩年には、『英漢予防医学名詞詞匯』の編纂事業も行っている。

金宝善の民国期における業績については、「国と民を利する視点によって、現代医療衛生制度を我国に建設するために、大変な努力を行った」(21) とされ、具体的には、以下の成果を挙げたとされる。①防疫事業の建設。②海港検疫権回収による、中国の検疫機構の建設（1929 年に、金が中心となり、「全国海港検疫条例」を制定し、各地の検疫事業を中国人の手に取り戻したという）。③現代医療衛生制度の建設。④衛生実験研究機構の建設（1932 年、彼が中央衛生設施実験処の建設を主導）。⑤地方郷村と辺境の衛生機構建設など。つまり、金は衛生行政を中心にした近現代中国の医療関連事業に極めて大きな貢献をした人物としての評価を与えられていることが分かる (22)。

〈『人民日報』紙にみる金宝善〉

金宝善は、近現代中国の「公共衛生学」の第一人者と目されていた。したがって、『人民日報』紙上にもしばしば登場し、その回数は、1949 年 6 月から 1984 年 11 月まで、38 件に上る。100 件以上登場した方石珊に次ぐ回数であるが、主な内容は、以下である。

ソ連の文化芸術代表団が、1949 年 10 月 12 日に南京を訪問した際、代表的文化人として歓迎会に参加した。

1950 年 9 月 28 日には、朝鮮戦争勃発に際し、元アメリカ留学生たちが、アメリカへの抗議声明を出しているが、金も「公共衛生専門家」として、署名している。

また「私の思想変遷」という論文を 1951 年 12 月 25 日付に署名入りで発表している。かつて日本やアメリカに留学し、特にアメリカの影響を受けたことを反省し、人民中国の建設に邁進することを誓う内容であった。

一方、方石珊と同様に、朝鮮戦争時、アメリカが細菌戦を行なうことへの懸念を「中央衛生部技術室主任（細菌学家）」の肩書で、厳しく指摘している。また、彼が就いていた全国政治協商会議委員に関わる記事も多い。

1957 年 5 月 6 日付紙上には、金が中国の衛生予防の不十分さを指摘した論文が掲載された。「我々は都市から農村部に至るまで医療事業を大きく発展させたが、予防工作の発展は非常に乏しい。医学教育の全体から言っても同じである。衛生部教育司司長は、文章を書けば、医療のことばかりを談じ、予防については語っていない。診察はするが、予防はしない。そのために患者が増えていく一方である」云々。

ところが、この発言などが一部の不興を買ったためか、「右派」のレッテルを貼られてしまう。同年 8 月 9 日付けに「北京医薬衛生界　右派分子紛々現形」という記事が出され、そこには、「北京医学院衛生系主任・金宝善（元国民党衛生署長）は自分で『衛生専門家』と名乗る『右派分子』である。社会改善運動の中で、事実を歪曲し、欠点を誇張し、成果を抹殺し、解放後の衛生事業は『メチャクチャである』と罵っている」のように、批判を受けるようになった（同僚の副主任からの批判文さえ掲載されている）。

しかし、1960 年 11 月 25 日付け『人民日報』に、「金宝善など 260 名が改悔の意を示したので、右派のレッテルを取り外す」という短い記事が発表され、３年の歳月を経た後、ようやく「嫌疑」を晴らすことができたことが分かるのである。

さらに、文革時にも批判を被ったことは、先に見た通りである。「右派のレッテルを外す」という 60 年 11 月の記事の後、再び『人民日報』紙上に、金宝善が登場するのは、1978 年 4 月 8 日に北京で開かれた「外国科技図書展覧会に著名老科学者、医学者が参観した」という記事で、見学した一人として名前が記された。そして、翌 79 年 2 月 3 日付で、「北京市が誤って『右派』と見た同志 35 人の名誉回復をした」という記事が出ることで、ようやく社会的活動も容認されたらしい。

1979 年 6 月には、さっそく中国人民政治協商会議の第五期全国委員に選出され、また辛亥革命 70 周年記念準備委員会委員に就任し、式典にも参加している（1981 年 10 月 10 日付）。1984 年 11 月 11 日に 92 歳で亡くなった際には、「公共衛生専家金宝善追悼会、在京挙行」との追悼記事が載せられた。金宝善について振幅激しい評価を見せてきた『人民日報』紙も、最終的には彼の功績を評価するところに落ち着いたことが分かるのである。

8）劉文超（劉歩青）【146】

1891～？年。陝西省三原県生まれ。千葉医科大薬学科を卒業後、上海亜林化学製薬廠の技師を経て、上海新華薬行経理に就く。また上海東南医学院教授も歴任している。1920～30 年代には、中華薬学会の幹部（副会長ほか）に就いていた（[23]）。

9）趙師震【192】

1899～？年。上海生まれ。1919 年、上海南洋中学卒業。20 年千葉医学専門学校入学。24 年卒業。帰国後、江蘇省立医科大学薬理学講師、ハルピン私立医院内科副主任、南通医学院内科教授、院長、青島市立医院内科主任、陝西省立伝染病医務長、上海東南医学院内科教授等を歴任する。

新中国誕生後は、東南医学院が安徽省に移り、安徽医学院と改称したのに伴い、同学院の内科教授を続ける。1950 年から 52 年まで上海中華書局で、また 56～62 年において人民衛生出版社で、医薬関係書の編集出版にも関わった。

写９　千葉医専アルバム

なお、趙は、日本敗戦後に台湾大学学長になった羅宗洛による日本留学時代の回顧文に登場する。第一次世界大戦後の中国留学生の勉学および日常生活について知ることができる貴重な文章なので、少し長くなるが、紹介したい。

「1919 年は五四運動が発生した年で、留日中国学生もまた影響を受けざるを得なかった。この年から私は口語文体を用い、友人との文通を始め、新知識・新思想を吸収した。私は南洋中学の同級生だった張忠道、趙師震、湯紀湖と一緒に、丸善書店に行って、英米の

進歩的雑誌を購入し、皆で輪読をした。最初の約束では、各人が自分で買った雑誌の重要だと思う論文をまとめることによって、一冊すべてを読む労を省こうとしたが、みな勉強がとても忙しくて、私を除いては公約を守ることができなかった。私はこれに大変不満を持ち、人よりは、自分で処理した方がよいと思うようになった。

（中略―1920 年の夏休み、房州に避暑と水泳の練習に行った）。房州は東京に近い海水浴ができる景勝地だった。水は清く砂は白く、波はない。しかもこの地は生活費が低廉で学生が避暑するのに絶好の場所であった。（中略）房州に行く途上か帰る時か、はっきり記憶していないが、千葉医専で学んでいる趙師震に面会した。彼はバイオリンを買って、学習し始めていた。彼は、『君も買えよ』と言って、すぐに楽器店に連れて行き、私の替わりにバイオリンを一個買ってくれた」云々（[24]）。

趙たちが丸善で購入した雑誌を仲間で輪読し、新思想を積極的に吸収しようとしていたこと、海水浴（[25]）をするなど夏季休暇はゆっくり取っていたこと、バイオリン演奏のような趣味も楽しんでいたこと、などが分かる。つまり、戦争開始までの日本は、留学生活を謳歌できる状況があり、その中で、留学生たちは将来の糧を培っていたのである。

10）張錫祺【207】

1898～1960 年。福建省泉州市生まれ。4 歳の時、父を喪い、10 歳で母に随って日本・神戸に渡る。日本で小、中学校を修了した後、中国の官費生試験に合格し、1921 年千葉医学専門学校医学科に入学。1925 年卒業後、同校の附属病院で研究を継続したが、26 年、彼は日本人の妻とともに、台湾・高雄に行き、光華眼科医院を開業した（1930 年はじめに、同院は上海に移る）。

写 10　『中国人名大詞典』

張錫祺は、また教育にも熱心で、千葉医専同学の湯蠡舟、陳卓人、趙師震などとともに、1926 年上海東南医学院を創建した。同医学院の経営が最も困難であった時期には、彼が経営する光華眼科医院の収入をすべて同校の維持経費にしたと言う。それは、「中国医学教育において、独立自主の旗幟を立て、経費調達に知恵を絞り、東南医学院を復興し、中国で外国人が医科高等教育を独占していることを打破する」（[26]）ためであった。

1945 年 7 月 25 日、日本が授与しようとした眼科博士学位授与と学術往来を張が拒絶したため、日本軍に逮捕されたが、まもなく日本は無条件降伏をしたため、災厄から逃れることができた。

新中国建国後、彼は上海市人民政府の「農村と向かい、内地に入れ」というスローガンに随い、東南医学院を安徽省懐遠県に移すことに同意した。学校は安徽省の省都・合肥に置かれ、安徽医学院と改名された。ここで、張は院長の職務を務め、また中国科学院安徽分院副院長、中華医学会安徽分会理事長なども歴任した。

張錫祺は、30 余年、医療に従事し、病人に対しては、なごやかで親しみやすく接したと

され、著名作家の田漢は、詩を作り、彼を「医徳過人（医徳が優っている人）」と賞賛したという（[27]）。なお、現在の安徽医科大学には、張錫祺の名を冠した奨学金が存在し、彼が大学内において、今も尊重されていることを窺うことができる。

〈『人民日報』紙にみる張錫祺〉

張については、1955 年３月から 2004 年 10 月まで、６件の記事が確認できる。安徽省人民委員会委員に選出されたこと、安徽省代表として全国人民代表大会に出席したこと等の記事である。1960 年５月 24 日付けには、短文ではあるが、「全国人大代表張錫祺逝世」とし、その訃報が載せられている。

２　現代中国の出版物等で活動が確認できる千葉医専・医科大卒業生たち

前章では、「人物事典」等に取り上げられている卒業・中退生を紹介した。ある意味で、これらの人々は、中国の近現代史上において重要な役割を果たした「著名人（偉人）」として、特別な評価を与えられているとも言える。

他方、「人物事典」の類には載せられていないが、一般図書や関連大学のＨＰ（インターネット）などで名前やその業績を確認できる卒業・中退生も存在する。そこで、前章同様、『人民日報』紙上に情報も適宜加え、その他のＯＢについて紹介していきたい。なお、以下での節番号は、人物紹介という性格もあり、前章からの通し番号にした。名前の後の数字は、１章と同じく、見城旧稿に掲載した千葉医専学生名簿の通し番号である。

11）鄧以蟄【79】

千葉医専を中退した後、美学者（哲学者）になったのが、鄧以蟄である。近代中国の医薬界に貢献した訳ではないが、中退後、専門を変えて、中国の近現代学術史に名を刻した人物である。東北大学が旧仙台医専を中退した文学者・魯迅との関係を高評するのであれば、本稿で彼を紹介することも悪いことではないだろう。

彼は、おおむね以下のような履歴を経て、評価をされている。

1892～1973 年。安徽省懐寧の生まれで、祖先には清代の有名な書道家・篆刻家の鄧石如がいる。1907 年に日本留学をし、弘文学院を経て、1910 年、千葉医学専門学校に入学する。留日期間に、西洋文化に触れ、また陳独秀を知り、その民主主義思想の影響を受けたとされる。また、千葉医専学生が「紅十字隊」を組織し、辛亥革命時の救護活動に赴いた際のメンバーにもなっている。しかし、千葉医専を中退し、1912 年に帰国した。まず日本語教師を務めた後、安徽図書館館長に就いた。1917 年、アメリカ・コロンビア大学に留学し、哲学と美学を専攻した。1923 年に帰国し、招かれて北京大学哲学系の教授に就任した。また雑誌等に詩歌、劇、美術、音楽等に関する文章を発表し、魯迅、宗白華、司徒喬等との交流を深めた。1920 年前後には、中国国内において、鄧は、宗白華とともに中国の美学分

野で最も高い評価を受けていた一人であるという。

新中国が誕生した後も、清華大学、中国大学で美学や美術史を講じた。1998 年には、『鄧以蟄全集』（全１巻、487 頁、安徽教育出版社）も出版されている（[28]）。

なお、兄の鄧初【99】も、1912 年千葉医専に入学している。こちらは無事 1916 年に卒業し、帰国後、北京内務部勤務を経て、山東大学教授になっている（[29]）。

〈『人民日報』紙にみる鄧以蟄〉

鄧以蟄関連記事は、19 件と比較的多い（1948 年 7 月～2004 年 5 月）。

まず、国民党軍との戦いを制した人民解放軍が北京に入る記事中、それを歓迎する「清華大学教授」の一人の中に鄧の名前が見える（49 年 2 月 4、5 日）。一方、蒋介石が故宮博物館などの文化財を持ち去ったことを批判する会合が、郭沫若ら四十数名の文化人によって行われた際、鄧は美学研究者として同席し、厳重に抗議する旨の声明を出している（49 年 3 月 17 日）。

戦後の平和運動にも、知識人として積極的に参与している。「中国文化界が宣言を発表『世界平和擁護大会招集に賛成する』」という記事の賛同者中に名前が見え（49 年 4 月 11 日）、また 1951 年 8 月には、日本が、アメリカ・イギリスと「単独講和」を結ぼうとしていることを批判して、「ソ連人民、アジア人民、日本人民と一致団結し、全面的公正的な対日講和を早期に締結すべき」との声明を複数の知識人とともに表明している（8 月 19 日）。

一方、1949 年に北京で「中国新史学研究会」準備会が発足した際、五十数名いる発起人の一人になっている（49 年 7 月 2 日）。このような人文学者としての鄧が、近現代中国の学術的先駆と見なされていることを窺わせる記事も少なくない。程孟輝「当代中国的西方美学研究」は、「1930～40 年代から宗白華、鄧以蟄、朱光潜等の先生による西洋美学の紹介と研究も進められた。これらの学者はまさに西洋美学を中国に紹介し、現代中国の西洋美学研究の基礎を定めた尊敬すべき先駆と言ってよいだろう」との高い評価を与えている（95 年 6 月 30 日付）。また、「北京大学哲学系創設 90 周年」の記事では、「蔡元培、胡適、蒋夢麟、熊十力、唐鉞、鄧以蟄、梁漱溟（以下、12 名略）などがかつてここで教鞭を執り、現代中国哲学の揺籃となった」と評されている（2004 年 5 月 14 日）。

12）郭琦元【169】

写 11『同仁』1931 年 2 月号

1891～？年。1918 年千葉医専入学。22 年卒業。帰国後、上海亜東医科大学教授となる。1926 年 5 月には日本留学仲間、とりわけ千葉医専同窓と集って、上海東南医科大学を創設し、校長となった。1930 年、私立東南医学院と改称し、附属東南医院も設立した（同院長ともなる）。この間に、彼はまた東南高級薬科職業学校も創立した。郭は、学内の知識分子の団結を行い、創業の苦しい時期にも医術に専心し、東南医学院と附属医院を上海で最も名声高いものとした。

1932 年１月に上海事変が起こった際、郭は皆を引き連れ、救護活動に積極的に参加した。これが反動派の恨みを買い、一時警察に逮捕拘束されたが、家族が宋慶齢などの協力を得て救援活動に奔走したため、釈放された。また 1937 年の日中戦争において、200 名の教員生徒と「中国紅十字会戦地服務団」の名義で、戦闘の最前線で救護活動を行った。

1945 年８月、日本が投降した後、国民政府の委嘱を受け、南京中央病院の接収に当たった。この時、同院には日本から徴集された軍医が５名いたが、３名が千葉医大卒、２名が東大医科卒で顔見知りであったため、接収は順調に行ったとされる（[30]）。

その後、故郷の楊舎に帰った際、医薬が少ないことを知り、郷村医院を出身地に創り、院長を務めた。([31])

郭は、千葉医専ＯＢたちが集って創建し、またその後も関係者が多く務めた東南医学院の初代院長である。同学院は、浙江省立医薬専門学校と並び、千葉医専ＯＢとの関係が最も深い学校となるのだが、そこに郭校長の戦略と想いを読み取ることもできるだろう。

同校については、ある資料では、このように説明している。

「1926 年５月留日から帰国した郭琦元先生が発起し、湯蠡舟と繆征中が強い協力をして上海に共同建設したのが東南医科大学である。『中国科技史料』中の「清末留日医学生及びその中国近代医学事業に対する貢献」には、次のような叙述がある。上海私立東南医科大学は、現在の安徽医科大学の前身である。1926 年、11 名が資金を持ち寄り、創設された。その中の少なくとも 7 名は日本留学経験を持っていた。この学校の教職員の大多数は留日帰国学生で、重要な職位は彼らが担当した。1920 年、上海の元留日学生・顧南群が創設した南洋医学院が、1930 年に閉校した時、学生は東南医学院に移された。これらによって、東南医学院の建立は、留日医学生が中国近代医学事業の発展に貢献した一事例と見なせることである（[32]）」云々。

郭琦元の名は現代の人名辞典類に頻出する訳でも、また彼が医学書を多く執筆した訳でもない。しかし、上海東南医学院において、研究仲間の環境整備や学生の教育に地道な力を注いだことは、「留日医学生」が中国に貢献した代表例と言って良いだろう。

〈『人民日報』紙に見る郭琦元〉

朝鮮戦争中に、アメリカ軍が細菌兵器を用いている嫌疑があったことについては、先の金宝善の項でも触れた。この時期に「中国紅十字会総会」も 14 名の連盟で、「我々はアメリカ細菌戦の毒焔を撃滅することを要求する」との声明を出しているが、その筆頭に郭の名前が見える（1952 年３月 21 日付）。

13）湯紀湖（湯蠡舟）【197】

1896～1957 年。1920 年千葉医専入学。24 年卒業。1919 年に起こった五四運動の影響を日本留学中に受け、新知識や新思想を吸収した。他の留学生とともに「丸善書店」で進歩的な欧米雑誌を買い求め、大家の意見を学んだ（[33]）。1925 年に帰国した後、国民革命軍第

一軍後方医院医務長、広州第一衛戍病院医務長を歴任し、1926 年上海東南医科大学教授、医務長に就いた。日中戦争中は、救護活動に奔走。日本の敗戦時に、救護総隊副総隊長であった湯は、新生の中国紅十字会に対し、被害者救護、復員兵援護をするべきことも指示している（[34]）。その後、上海東南医科大学が安徽省に移る際、医学院長として、その作業に尽力し、安徽医科大教授となった。

写 12　千葉医専アルバム　写 13『同仁』1930 年 9 月

子息の章城による評伝は、「湯蠡舟の 61 年の生涯中、辛亥革命、五四運動、北伐戦争、十年内戦、抗日戦争、解放戦争、国民党政権退去、抗米援朝（朝鮮戦争）、および新中国成立初期の発展や多くの運動を経験した。長きにわたる労苦は、彼を遂に病につかせ、1957 年 10 月、逝去した」と記しているが、湯紀湖や同世代の仲間たちは、まさに激動の中国近現代史を生き抜いたことになる。なお、章城は、中国社会科学院上海分院の元院長や第九期全国人大代表を務めたとされる（[35]）。

〈『人民日報』紙に見る湯紀湖〉

郭と同様に、湯も「現東南医学院長、安徽地区医務工作者協会企画委員会副主任」の肩書を持って、「アメリカが細菌戦を展開することは国際法違反であり、恥ずべき行為である」との談話を出したことが紹介されている（1952 年 2 月 28 日付）。

14）張效宗【217】

張は、山西省出身で、1921 年千葉医専薬学科に入学。25 年に卒業し、ただちに千葉医科大学医学科に再入学。29 年に卒業している。帰国後は、陝西省防疫処研究科主任、上海東南医学院教授などを歴任した人物である（[36]）。

『人民日報』1950 年 2 月 12 日付に掲載された「新しい戦争の挑発者を警戒せよ。全国人民はソ連の提案を擁護し、細菌戦犯を厳しく罰することを要求し、死した同胞の仇を取ろう」という記事中の中で、張は「西北大学細菌学教授」の肩書で登場し、「科学者として、日本の細菌戦犯を審議しようとするソ連を支持する」という趣旨の発言をしている。

15）鄭万育【229】

鄭は、江蘇省出身で、1928 年に千葉医科大学に入学。32 年に卒業した後、広西省立医学院産科教授に就いたこと（[37]）、また、1936 年から浙江省立医薬専科学校教授になったこと（[38]）が分かっている人物である。

ところが、鄭万育は『人民日報』1957 年 8 月 8 日付「希請勿急勿躁（急がないで落ち着くことを願う）」という記事中で、厳しく批判されることになる。「江蘇医学院の右派分子である鄭は、党や社会主義に対して、批判的な謬論をあれこれ述べている。彼は『客観的

現実と自身の体験に至るまでは、時間を必要とするので、急がず、落ち着いて欲しい』と述べているが、それ自体が右派の言い訳にすぎない」云々。

この続報は『人民日報』紙に結局掲載されることがなかったため、「江蘇医学院に勤務していた鄭が、右派批判を受けた」ということしか分からない。

金宝善が「右派」として批判された記事が載ったのは、この翌日の 9 日付であった。金は 1960 年に名誉回復していることが『人民日報』紙から明らかになるが、鄭のその後については不明で、同紙以外から調査をする必要があるようだ。

16）葉曙【237】

1908～？年。湖北省蒲圻の出まれ。1930 年千葉医科大学医学科入学。34 年卒業。千葉医科大病理学教室で副手を務め、1938 年医学博士の学位も得ている。1943 年、帰国して、上海東南医大の病理学教授、教務長になる。

1946 年、台湾に渡って（[39]）、台湾大学医学院病理学科教授となり、同大で 40 年余り研究と教育に従事した結果、「台湾病理学の父」とまで称されているという。中央研究院評議会評議員も５度務めている。回顧的著書に『閑話台大四十年』『病理三十三年』がある（[40]）。

17）張斟滋【246】

かつての筆者の調査で、張については、「山東省出身。1936 年千葉医科大学入学、40 年卒業。あとは不明」という程度しか分からなかった（[41]）。

その張の名前が、『人民日報』紙上で、2 件看取できる。一つは、「中央人民政府政務院　第四十次政務会議」で、「山東省人民政府　衛生庁　副庁長」に任命された由。現職は「山東省濰坊楽道医院院長」となっている（1950 年 7 月 9 日）。また、1955 年 3 月 8 日付には、「山東省選出人民委員」に選ばれた旨の記事がある。

つまり、この 2 件の記事によって、張が、新中国になった後、地元山東省の病院院長を務めながら、山東省の政治にも関与していたことが分かるのである。

18）柳歩青【260】

1913 年、広東省生まれ。1932 年来日。1938 年、東京歯科医学専門学校卒業。同年、東京帝大医学部歯科学教室入室。1941 年、千葉医科大学入学。1945 年卒業。同大第二内科学教室助教。1946 年帰国。上海・南洋医院内科主任兼第二医学院内科学教授。1949 年、北京市口腔医院院長に就任。また北京大学口腔系教授も兼任（1962 年、文革期に大学は退任）。

なお柳は、『あのころの日本―若き日の日本留学を語る』（[42]）で「医者修業とはかないロマンス」という千葉医科大学時代を含む戦時下留学生としての貴重な回想を残している（[43]）。一方、専門に関わる「中国の歯科事情」と題する特別講演（1978 年）が、九州歯会の機関誌に掲載されている（[44]）。

〈『人民日報』紙に見る柳歩青〉

柳歩青の名前が見える記事は、1972 年 8 月～1985 年 3 月まで 6 件ある。

最初は、1972 年 8 月 15 日付で、ペルーの歯科協会主席が訪中した際、中国医学界代表の一人として、歓迎会に参加した記事である。1982 年 5 月 2 日付では、「口腔医学専門家が口腔医学事業を強めることを呼び掛けた――『歯の病気は看てもらいにくい』という大衆問題を切実に解決したい」という見出しの下で、柳は中国の代表的歯科医師として、口腔医学（歯科学）の発展を強く訴えている。さらに孫文逝去 60 周年記念式典に、「各界人士」の一人として参列したことも見出すことができる（1985 年 3 月 13 日付）。

これらから、柳が、中国（北京）の歯科医師の中で、もっとも著名な一人として認知され評価されていたことが分かるのである。

以上、１・２章では、千葉医専・医科大を卒業また中退した留学生中で、その活動が現代中国で認知、評価されている人物 18 名を紹介してきた。この中で歴史的成果を残した最重要人物と目されるのは、金宝善であろうか。中学校在籍に魯迅にドイツ語の教授を受けたところから始まり、逸話には事欠かない金であるが、特に、衛生行政体制構築に果たした活躍は目覚ましいものがあった。国民党政権末期においては、袂を分かち、アメリカ移住も決意したようだが、新中国建国に伴い、帰国貢献。そこで、２度にわたる政治的困難に直面したものの、その間は地道な翻訳作業にあたり、後輩たちの研究基礎を作り続けるなど、その起伏に富む人生は近代中国知識人の姿を明確に映し出すものであろう。

ほかの人物も、若き日にそれぞれの形で辛亥革命に関わり（ある者は命を落とした）、留学先の日本で西洋思想や医学技術を学び、帰国後は近代的医学校の教員等になり、若者の育成に従事した。そして抗日戦争にあたっては、救護隊を組織し、また抵抗した。

これらの経歴や彼らが日本で修得した知識を母国で活かしていったことが、現代中国で評価されていることを知ることができるのである。

３　千葉医専・千葉医大卒業生が中国で出版した著作

日露戦争前後から急増した中国留学生たちは、日本に流通していた「西洋学術」を日本で学び、それを母国に持ち帰り、近代国家の建設に役立てていた。すなわち、彼らが学術書を翻訳紹介したり、あるいは自ら執筆したことは、学術交流という側面からきわめて重要と考える。たとえば、筆者は旧稿で、同仁会（[45]）が 1927 年に立ち上げた「華文医薬学書刊行会」において、元留学生たちが、日本の医学書を中国語に翻訳、刊行したことを紹介した（[46]）。同仁会側の記録によれば、1942 年までに 31 種類が発刊され、千葉医専・医科大ＯＢの何人かも翻訳に関わっていたが、これらの翻訳書は学術性・実用性ともに高く、中国人のニーズにも応え、売れ行きが好調であったとされる（[47]）。

よって、本章では、千葉医専・医大ＯＢたちの著作（一部、雑誌編集を含む）について、

知り得たものを列挙紹介しておく。また、著作の「序文」などに、日本留学との関連や同時代の中国で著作を出版する意義などが記されている場合は、それを紹介し、合わせて参考に供することとする。

なお、これらの著作を把握する際、北京図書館編『民国時期総書目（1911～1949）：自然科学・医薬衛生』（書目文献出版社、1995 年）は、北京、上海、重慶各図書館所収の蔵書を分野別にまとめた目録で、きわめて有益かつ簡便な資料であった。そこに収録されていた著書を中心に、上海図書館、中国国家図書館（北京）、上海師範大学、北京大学、復旦大学などの蔵書目録（ウェッブ検索）で存在が確認できた著書や各人の評伝に載せられていた著書を加えたものを以下に挙げていきたい。

１）侯毓汶（侯希民）【7】：1908 年医卒、北京市衛生局局長ほか。
1 雑誌『衛生叢報』（全 5 巻責任編集；1916 年 2～10 月）。2 雑誌『民国医学雑誌』（主編；1923 年 7 月～、北京民国医学雑誌社発行。1933 年の 11 巻から「東方医学雑誌」と改名。1940 年 12 月、18 巻で停刊）（48）。

２）沈王楨【13】：1909 年医卒、北平大学医学院教授ほか。
1 外科各論講義　第３巻（編；年次不明）、2 耳鼻咽喉科学（赤松純一著作を翻訳；1948 年初版、51 年再版）。

３）方擎（方石珊）【20】：1910 年医卒、北京医学専門学校教授ほか。
1 日本医学発達史談（1928 年 5 月）、2 中国生命統計初歩（1929 年）、3 予防癆病（附、癆病生活指南）（1930 年 3 月）。4 論文「中国衛生行政沿革」『中国医学雑誌』14 巻 5 号、1928 年。

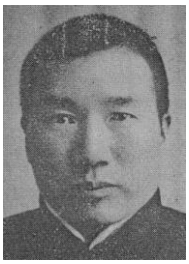
４）華鴻【30】：1909 年薬卒、浙江省立医薬専門学校教授ほか。
1 雑誌『薬報』（主編、浙江省立医薬専門学校発刊、全 47 冊、1920 年～1937 年）。（49）

５）李定【45】：1913 年医卒、浙江省立医薬専門学校教授ほか。
1 常用処方集（1948 年 12 月初版、49 年 9 月再版、51 年 8 月増訂３版、54 年修訂版、56 年再版）、2 局部解剖学（1936 年 10 月初版、37 年再版。55 年 12 月３版、57 年 3 月第二次印刷）。

６）丁求真【49】：1914 年医卒、浙江省立医薬専門学校教授ほか。
1 衛生学綱要　上巻（編；1926 年 3 月）

沈王楨（千葉医専卒業アルバム）

李定（千葉医専卒業アルバム）


丁求真（浙江医薬専門学校一覧）

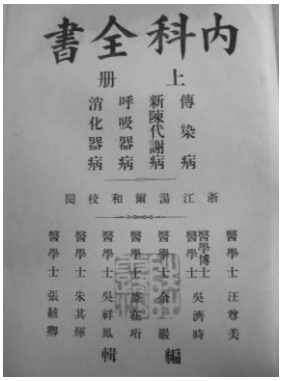
７）朱其煇【61】：1914 年医卒、浙江省立医薬専門学校教授ほか。
1 内科全書（呉祥鳳ほか編；上巻 1919 年 5 月、下巻同年 10 月初版。1934 年国難後 1 版。35 年 6 月 3 版）

８）何煥奎【62】：1914 年医卒、江西省立医学専門学校教授ほか。
1 新中華健康教育、1932 年、上海中華書局。

９）金子直【63】：1914 年医卒、南京政府衛生部ほか。
1 民族衛生（1930 年 7 月）、2 家庭医学（1934 年 11 月）、3 通俗衛生（1934 年 6 月。1939 年 9 月、４版）、4 国際連盟諸政府派遣赴英国及印度研究公共衛生報告（年次不明）。

金子直
（『同仁』1930 年 4 月号）

10）呉祥鳳【64】：1915 年医卒、北平大学医学院院長ほか。
1 内科全書（朱其煇ほか編；上巻 1919 年 5 月、下巻同年 10 月初版。1934 年国難後 1 版。35 年 6 月 3 版）、2 国立北平大学医学院二十周年紀年刊；序文（1933 年 7 月）、3 神経病学（1932 年 12 月）、4 呼吸器科之病理与療法（通俗医科大学講座訳本：伊藤尚賢著の翻訳、1934 年 8 月）、5 胃腸科之病理与療法（同）、6 泌尿生殖器科之病理与療法（同）、7 婦人科之病理与療法（同），8 産科之病理与療法（同）、9 小児科之病理与療法（同）、10 脳脊髄神経之病理与療法（同）、11 神経衰弱科之病理与療法（同）、12 皮膚及花柳病科之病理与療法（同）、13 耳鼻咽喉科之病理与療法（同）、14 臨床便覧（発行年次不詳）。



11）潘経【117】：1916 年薬卒、南京軍政部軍医司科長ほか。
1 西薬配制大全（1923 年 10 月初版、35 年 10 月 3 版）、2 臨床処方（中国語・ドイツ語対照：1930 年 9 月）、3 薬物便覧（1944 年 5 月）。

12）金宝善【122】：1918 年医卒、北京大学医学院教授ほか。
1 衛生行政（1942 年 1 月）、2 実施新県制与衛生建設（1943 年）、3 衛生行政問題（1944 年 3 月）、4 三十年来中国公共衛生之回顧与前瞻（1946 年）、5 平民衛生教育学摘要（発行年次不明）、6 非常時期之公共衛生之回顧与技師（発行年次不明）、7 衛生学及保健組織（発行年次不詳）、8 戦時地方衛生行政概要（発行年次不明）、9 英漢予防医学詞匯（1985 年）、10 金宝善文集（北医公衛「夕陽紅」編輯組編：2007 年）。11「三十年来中国公共衛生回顧与前瞻」『中華医学雑誌』32 巻 1 号、1946 年。12「民国以来衛生事業発展簡史」『医史雑誌』2 巻 1 号、1948 年。

13）蹇先器【141】：1920 年医卒、北京大学医学院教授ほか。
1 皮膚及性病学（土肥章司著の翻訳：1949 年 1 月初版。51 年 1 月 4 版）、2 泌尿化学（志賀亮著の翻訳：1949 年 1 月初版。50 年 11 月 3 版）。

14）劉文超（劉歩青）【146】：1918 年薬卒、上海東南医学院教授ほか。
1 調剤学講義（1933 年）、2 安瓿（アンプル）製造法（1935 年）。

15）郭琦元【169】：1922 年医卒、上海東南医学院院長ほか。
1 雑誌『東南医刊』（主編：郭、陳卓人【171】、湯蠡舟【197】ほか。上海東南医学院東南医刊社、1929 年 1 月～1933 年 12 月、4 巻 4 期停刊。）

16）陳倬（陳卓人）【171】：1922 年医卒、上海東南医学院教授ほか。
1 内科診断学（1932 年 7 月、35 年 7 月再版）、2 小児嘔吐和腹瀉（1951 年）、3 小児病常識（1952 年）、4 麻疹（発行年次不詳）、5 神経病学（発行年次不詳）、6 雑誌『新医薬』（上海中華民国医薬学会、1931 年 9 月、1934 年の 2 巻 1 期から『中華民国医薬学会会志』、5 巻 4 期停刊）。

17）趙師震【192】：1924 年医卒、上海東南医学院教授ほか。
1 孕産婦之友（1935 年 2 月初版。1949 年 10 月３版）、2 近世内科全書　１～３冊（1 冊：1935 年 5 月。2 冊：1936 年 5 月。3 冊：1937 年 8 月）、3 内科診断学（1940 年 2 月、45 年 12 月）、4 近世内科学（上冊：1947 年 5 月。下冊：1948 年 9 月）5 薬理学（1949 年、53 年。翻訳。元著者不明）、6 神経病学（ソ連高等医学院校教学用書：Ｅ．Ｋ．サイフーほかの元本を翻訳、1956 年）、7 包特金内科講演集（内科臨床教程：Ｃ．包特金（パオトァーチン）の元本を翻訳、1957 年）、8 趙氏英漢医学辞典（1952 年。68 年。76 年。83 年）、9 人体正常解剖学（翻訳、詳細不詳）。

18）湯紀湖（湯蠡舟）【197】：1924 年医卒、上海東南医学院教授ほか。
1 救護与防毒（1936 年 12 月初版、37 年 8 月３版）。

19）王吉人（佶）【198】：1925 年医卒、浙江省立医薬専門学校校長ほか。
1 実用外科総論　上巻（1933 年 3 月）、2 怎様蹋足球（サッカーとはどの様なものか：監修；1935 年 5 月）

王佶（千葉医専アルバム）

浙江医薬専門学校一覧より

20）張錫祺【207】：1925 年医卒、上海東南医学院教授ほか。
1 眼底病図譜（1940 年）。

21）黄裕綸【219】：1925 年薬卒、1929 年医卒、南通大学医学院教授ほか。
1 戦地及一般救護学（1939 年 2 月）。

22）章志青【226】：1929 年薬卒、1933 年医卒、浙江省立医薬専門学校教授。
1 各科診療手冊（前篇：1948 年 3 月初版、49 年再版）、2 臨床薬理学（1948 年 7 月初版、1950 年再版、53 年三版）、3 現代各科処方手冊（1950、1951 年）、4 臨床病理検験法（1951 年）、5 臨床診断学（1953 年）。

章志青（浙江医薬専門学校一覧）

23）徐伯鋆【236】：1932 年薬卒、浙江省立医薬専門学校教授ほか。
1 生薬学（1934 年 4 月）。2 現代本草生薬学（趙橘黄との共著：1934 年）。
24）葉曙【237】：1934 年医卒、台湾大学医学院教授ほか。
1 病理学（出版年次不詳）、2 応用病理学（不詳）3『閑話台大四十年』、
4『病理三十三年』。
25）柳歩青【260】：1945 年医卒、北京大学教授ほか。
1 受歯知識与口腔衛生（1941 年 8 月）、2 臨床口腔診断治療学綱要（診断篇）（1951 年）。

以上、25 名の著書を挙げたが、一部の著作には、序文等に、出版の歴史的意義や日本留学時代の何らかの思い出（意味づけ）などが記されているものもある。それを紹介しておこう。

２）沈王楨訳（赤松純一著）『耳鼻咽喉科学』（1948 年）
「弁言
科学が遅れている中国にあって、科学に関する書籍はほとんどすべて国外に求めている。たとえ数少ない本国出版者がいたとしても、多くを求められない。そのため外国語に精通していない多くの学生たちは、原本の精髄を得ることが難しい。あるいは書物の価格が高く、入手が困難である。貧しい子弟は、ただ嘆くのみである。医学は科学の一つであるのに、こうしたことが起こっているのは残念なことだ。
時代がすすみ、医学書の新本は続々刊行されている。本社は需要に応じるため、同仁会各科医学訳本を増訂刊行し、学子の便宜とする。ただ時間が慌ただしく、疎漏は免れない。望むらくは、国内の学者からご指摘いただければ、幸甚である。」

※中国における科学知識の導入は、海外書籍の翻訳によるところが大きい事、そのため（日本の）訳書を出すことは大いに意味があることを述べている。また、ここでは、抗日戦争勝利後も、同仁会が翻訳した医学書が普及していたことに注目しておきたい。

５）李定『常用処方集』（1948 年）
「『常用処方集』は、故李定教授生涯の代表作である。十余年来、全国から評価の声を受け、医学界では基準になった。李教授は民国 18、19（1929、30）年にこの書を編輯し、すでに多くの実績を上げており、学識や経験が広大であることは十分に知られている。」

※同書が、李定の代表作であり、「医学界の基準」となっていることが分かる。

９）金子直『民族衛生』1930 年
「吾国民族は四億人と言われている。しかし、いまだ生死の登記や疾病の調査は実行さ

れていない。最近の推定では、吾民族の死亡率をイギリス、ドイツなどと比較すると、毎年本来死ななくても良い死者は六百万人を越え、病まなくても良い病人が六千万人以上もいる。この実談は、民族主義者であろうとなかろうと共に注意すべき問題である。

吾民族の繁殖力と南洋一帯の発展は、世界が驚異するところである。しかし、花柳病の蔓延とアヘン中毒は吾民族の体質に日々低下をもたらしていることも、有識者がよく知るところである。しかのみならず、痰を吐くなど汚く不潔な悪習は、特に衛生を害するものではあるまいか。外国人が唾棄嫌悪すべきところである。これまた民族主義者であろうとなかろうと、共に注意すべき問題である。

私は吾民族の各階級が、上は政治家・教育家・経済学者・法律学者、軍人及び官吏など、下は男女学生、農民や召使に至るまで、ひとしく民族衛生に留意することを望んでいる。」

※方石珊、金宝善など近代中国の公共衛生学に貢献した人物が千葉医専出身者には多かったが、金子直も「衛生」に関する著書を複数出している。この文章を読むと、そうした問題の克服が、近代中国における喫緊の課題であった事が分かる。

12）金宝善主編『英漢予防医学詞匯』人民衛生出版社（1985年）

「前言

ここ30年来、予防医学の重要性は世界各国が公認するところとなり、その発展も迅速である。新しい名詞もまた日々増えており、衛生防疫人員と医薬学校の教員学生の大勢に対する英語中国語対照の辞書作成の必要が迫られてきた。

我国衛生部の衛生教材編纂委員会は、かつて1951年にロシア語、英語、中国語対照の『公共衛生学術名詞』を試みに作成した。当時、蒐集した単語は多くなく、その後修訂はされていない。私はこの種の書物を編纂することを長く志しており、このたび北京医学院及び北京医学院衛生系の協力によって、仲間を組織し、三年かかって、本書が完成した。（略）

本書は、環境衛生と環境衛生医学、労働衛生と職業病学、栄養と食品衛生学、流行病学、衛生統計学、社会医学および衛生事業管理学、児童少年と学校衛生学、軍隊衛生学、公共衛生看護学、放射衛生学、衛生化学と検験、衛生毒理学などの常用名詞を包括し、また近年出現した新用語を合わせて、14000余りを集めた。衛生防疫に関わる人や医薬衛生院の教員学生が参考に使うことができるようにした。

私の能力レベルには限りがあるので、選択した詞および訳文において、適切でないところもあるが、読者の意見を受け、今後改修し、充実を図っていきたい。」

※金宝善は1984年に91歳の高齢で逝去するが、その「遺著」と言える辞典である。金が文革期等の困難な時期に、このような形で辞書の編集作業を進めていたことから、彼が生涯をかけた衛生防疫事業への熱い想いを知ることができるだろう。

13）蹇先器訳（土肥章司著）『皮膚及性病学』増訂版　1951 年

増訂弁言　「土肥章司博士（[50]）は、日本の著名な皮膚・性病の専門家である。その著作『皮膚及性病学』の一書は、この分野唯一の巨著である。戦前、北平医大・蹇先器教授が翻訳した後、遂に我国医学界の大きな業績と見なされるようになった。我々はその治療法がやや古くなったことを認め、ゆえに資料収集をし、増訂を行い、現代の需要に適合させるようした」

※この『皮膚及性病学』も、ここに明記されているように、戦争中に同仁会の企画で翻訳された医学書である。同仁会自体は軍部の中国侵攻とともに、その協力機関と化し、敗戦後は解散させられるのだが、元留学生と連携して行った翻訳事業については、新中国においても、「医学界の大きな業績」として評価されていることが分かる。

17）－1　趙師震『近世内科全書』（1935 年）

①　郭（郭琦元）序

古（いにしえ）の君子、身を立て道を行う仕事は、己において成るのであり、人において成るものではない。身において修めるのであり、天に頼るものではない。けだし、人において成り、天に頼ることは遺憾であり、自ら修め、すべて自ら勉めるべきである。

趙師震君は、余の同学であり畏友である。束髪読書のすぐれた仲間である。日本に渡り、医学を学び、帰国後、教鞭を取る。その名は国中に知られ、気節をもって自負し、道学をもって自許す。時を得ざるにより、潔然と引去し、市井で退隠す。しかるにまた学の道を忘れられず、十年来の経験を重ね、よく考えた結果、近世内科学を著述して、世に問う。心の苦しみや急時の急においても、学をなすことを忘れることがなかった。

すなわち、世教をまとめ、もって後進を啓発した。その立言立徳、また人において待つことなく、天に頼ることなく、己の身において修めたものと言うべきである。

私琦元は十年軍隊にかかわり、碌な成果を樹立するところがなく、趙君に愧じることは、文字だけではない。いくつか推薦の言葉を語ることによって、少しでもその驥尾についていき、もって自分の励みにしたい。そして趙君の学問がさらに進歩し、後進たちが自分の身において修めることを励むことを望んでいる。

この著書の内容は、詳細で意を尽くすものであり、賞賛される。この分野を学ぶ者は、多くのことを知ることができるだろう。

私がこれ以上、無駄な話をすることはない。これを以て序文とする。

1934 年冬至夜。同学弟郭琦元これを記す。上海真如東南医学院。

②　陳（陳倬）序

我国最近数十年になってから初めて新しい医学が輸入され、新医学、すなわち科学発達の自然な結果であり、陰陽事などの非科学的なことと同列に語ることはできなくなった。しかし我国の科学は落後しており、進歩は遅滞している。医の一道はとりわけ精究しにく

い。今日まで、我国の医学界は、なおいまだ翻訳と輸入の時代を脱していない。それが事実である。ああ、言いたくないことだが。日本は明治維新以来、わずか七十年、初めはオランダから新医学を輸入し、さらにフランス・ドイツ医学も継続的に取り入れ、政府の提唱と学者の努力とによって、日進月歩の状態である。医術は深くて詳しく、各国の評価も高い。ついに輸入者から転じて、輸出者となった。しかも日本の医者は知識を求めることが甚だ盛んで、国外すべての価値ある新刊物は、数ケ月を待たずして訳本が出版されている。教科書もまた同様である。売れ行きの早さは人を驚かせ、一年から三年の間には必ず改訂新本が出る。これを読む者は最新の知識を獲ることと世界医学の趨勢を覘き知ることができる。その勢いは突飛猛進と言え、その益が尽きることはない。

一方、我国を顧みると、果たしてどうだろうか。医学を学ぶ者は多くない。医学界で読書習慣を持つ者はさらに少ない。

私はかつて一書を出版し、十数年経つが、なおいまだ改訂できていない。私はこれを大変後ろめたいことと愧じており、言葉もない。それ医学は科学の一種であり、科学は日進月歩で、今日の新知識が明日にはすでに旧説に属す。十年前の学説は、今日すでに適用することはできない。ゆえに、医学の書において、斬新を求めることが、根拠ある最適の治療となるのである。

同学趙師震君は、医学を精しく研究し、江蘇・南通各医科大学において教職を歴任した。その講義を編纂し、「近世内科全書」とするところの益は大変大きい。私は本書を受け取り、目を通したが、詳しくかつ的確で、説理もよどみがなく、内科学上に必要な知識はすべて残すことなく含まれていて、大変喜ばしい。

聞くところによると、趙君は本書編纂にあたり、長く時間がかかったため、途中で新学説と新療法を加えなければならず、およそ三回原稿を変えたそうである。なんと真面目なことだろう。この一書が出たことを知ることは、まさに一世を風靡し、我国内科医書中の傑出であろう。世の医学者はこの一編を宜しく手に取るべきであろう。

これを序とする。

中華民国 23（1934）年 12 月

陳卓人（上海東南医学院）

③　自序（趙師震）

我が国が西洋医学の輸入をはじめてから百年にも及ばんとするも、新しい医書はいまだきわめて少ない。先輩の方石珊先生（[51]）が我国の新しい医学が発達しない原因を痛論しておっしゃるには、「座病である（実践的でない）」、と。余はその文を読み、深く感銘を受けた。

この書に載せる所のものは、南通医学校教授であった余が、学生の教材としてすべてまとめたものである。当時我国には適当な内科教本がなく、Domarus,Strumpell,Mering,Osler など諸名著の材料を採用し、また個人的な経験を参考としながら取捨選択したものを教材

として編纂し、学生に授けた。一章一編まで、原著から完全に訳したものが多い。考えてみると初めは著作と言えず、出版の意思はなかった。ここに石珊先生の言葉に感ずるところあって、遂に自らの力不足を顧みず、世に問うことにした。

本書は元来学生のために編じたものではあるが、整理を重ねていく際に、実地の医学者が購読することも少数ではなく、ゆえに所々に改修を加え、実用の適合をもとめ、材料の取捨選択をおこない、我国の環境に適合するようにした。世界の新発見がどんなに採用されても、人後に落ちないことを期するような自覚と十二分の努力を尽くした。ただ編者は学識に乏しく、文筆もうまくない。この書はまた急いで作ったので、錯誤や脱漏が必ず多くあるだろう。読者が教えを賜ってくださり、完璧なものになることを望んでいる。

この書を出版することができたのは、知友の勉励と督促、さらに中華書局の学術に対する熱心さによる。皆に深謝したい。また引用した諸書に対し、謝意を敬したい。

民国 21 年（1932 年）仲春　淞陽趙師震記す

17）－２　趙師震等編訳『内科診断学』序（1940 年）

『内科診断学』は、亡友許棟材（見城注―千葉医専同窓の許枏【193】のこと）君の発意により、民国 15（1926）年江蘇省立医科大学生理学教授室で、許君が国内で診断学の適切な書籍が乏しいことを鑑み、夏休みを利用して、ドイツ人 Klemperer の世界的名著 Dingnostik der Inneren Krankheiten をそれぞれ半分ずつ担当し、共同翻訳をしたものである。翌年三月の完成を期したが、顧みれば、この年私はたまたま日本に行き、それを果たすことができなかった。（中略―1930 年、南通医学校校長となったこと、自著『近世内科全書』の編纂にあたっていたことなどにより、翻訳が遅延しているうちに、許君が病に倒れ、1931 年に亡くなってしまった。その後も作業は曲折を経たが、1937 年の上海事変の勃発で印刷が遅れるなど、許君の発意から 13 年、病没後 8 年に、ようやく完成した）。

13 年経っても、国内の医書出版はあまり活発でなく、内科診断学の文化においても、今なお適書は少ない。あたかも 13 年前の情景と変わりがなかった。

戦火迫る国難の中、この書を国民に紹介することによって、泉下の故人に罪がなかったことを告げることができる。

17）－３　趙師震『趙氏英漢医学辞典』（1952 年）

かつて私は医学校（千葉医学専門学校）を卒業した後、同校の生理学教室に進み、２年生理学を学んだ。研究室の主任は酒井（卓造）教授だった。先生は同学の間では癇癪持ちとして知られていたが、教室では和気あいあいとしていた。1924 年のある日、先生が私の研究室に来て指導した。閑談を始めたところ、テーブルの上に、十数版を重ねた恩田重信氏の独日医学辞典があった。これは当時の日本で、もっとも基本的な辞書であり、医学生と医学者は必ず一冊持っていたものである。

先生はそこで一つの話をした。その大意は、この辞書がなければ学業（学薬）は成らな

い。正式な高等教育を受けていない人はドイツ語基礎が弱いので、詳しい辞典には感服すべき価値がある（実際に、私の辞典はこの辞書と全く同じ性質を持つ）というものだった。

明治時代後期の日本医学はまだ幼稚な状態で、医書もたいへん少なかった。恩田氏のこの辞書が刊行されてから、翻訳が積極的にされる時代に入った。西洋の有名な医書がたくさん翻訳され、日本に紹介された。大正時代は日本医学の猛烈な発展期であり、遂に欧米をも上回る勢いであった。彼の辞書は後に出版された辞書に大いに関係を持つ。つまり恩田氏の功績は記念碑的な価値があるのだ。

私は当時国を憂い、情感あふれる青年であり、この話が強烈な反応を引き起こし、なんとか翻訳したいと言う熱情的な衝動が生まれた。ただちに、恩田氏の辞典を翻訳する計画を立てたが、試訳に終わり、頭を冷静に戻すことが必要であった。この計画は明らかに幼稚であり、笑うべきものであった。そしてその作業は継続することができなかったが、辞典編纂の大きな夢はいつも頭にあって、今日まで忘れることはできなかった。

ここ二十年で、少なくない医書が翻訳されたが、時間がない時に、適当な翻訳名がないことに心を痛め、老いてますますその意識が強くなった。

※千葉医専関係者が著した医学書は少なくなかったが、序文等の記載は総じて淡泊で、日本留学時代のこと等を記しているケースは多くない。

そうした中、趙による３冊の自著序文および１冊目に収められている千葉医専の仲間である郭琦元と陳倬の推薦文は、留学生たちが日本で学んだ事、それを母国で翻訳等をして流通させたことを明らかにするきわめて貴重な証言である。たとえば、陳倬は、1920、30 年代の日本医学界の知識流入の速さを「突飛猛進」と表現しているが、それらを彼ら留学生たちが余すところなく吸収し、母国に持ち帰ったと理解することができるだろう。医学校教員などになった元留学生たちは、その知識をある場合は教室で医学生に伝え、ある場合は、出版の形で人々に広く伝えていったのである。

趙が辞典編纂を志した逸話も興味深い。すなわち、日本の医学界が「独日事典」を得て、急発展したことを、千葉医専留学時代に目撃した趙は、中国で同様の事典を出すことを宿志とし、時間は相当かかったが、遂に発刊したというのだ。

苦労の甲斐あって、この事典は今でも「英漢医学辞典」の古典的位置を占めているようである。1952 年に北京の中華書局から発刊された後、1968、93、さらに 2009 年にも香港で重版されるなど、現在でも広く流通利用されていることが分かる（[52]）。つまり、千葉医専の研究室で見た恩田版事典と同様に、趙の事典は現在も中国語圏で重要な役割を果たし続けているのだ。それは、ある意味で、時空間を超えた「知」の連鎖伝播の重要な例証となるであろう。

４　千葉医専・千葉医大卒業生が関わった医薬団体・学会

清末から民国初期に留学、帰国した元留学生たちは、近代医学の団体を続々と創設していく。本章では、千葉医専の関係者が中核的に関わった団体等を紹介していく。

１）中国医薬学会

1907 年に、千葉医学専門学校内で、中国留学生たちが設立した団体で、雑誌『医薬学報』を出版する母体であった。編集は、方擎（方石珊）が携わっていたとされる（53）。同誌は 07 年 2 月に第一号を発刊し、事後隔月刊で 12 冊出した。1909 年 2 月から月刊になり、さらに 12 冊発刊の後、停刊している。

以上は、主に鄭鉄涛・程之范編『中国医学通史　近代巻』（人民衛生出版社、2000 年）の叙述に拠る（p510）が、同書「第八章　近代西洋医学雑誌の出版と医薬学術団体」「第二節　主要西洋医学雑誌の創刊」の項目には、「1912～1937 年、民国建国から抗日戦争勃発に至るまでの間は、我国西洋医薬雑誌の発展成長期であった。辛亥革命後に社会の空気が変わり、西洋医学の医院と医学校が日を追うことに増加した。それに加え、新文化運動の影響により、西洋医薬雑誌は雨後の筍の如く次々に誕生して行った（p508）」との記述がある。そして、その先駆けとして、「1907 年、我国留日学生が、中国医薬学社編集出版の『医薬学』（見城注：千葉医専留学生による「中国医薬学会」と『医薬学報』のこと）、中国国民衛生会（金沢医専）編集出版の『衛生世界』を日本で創刊した（p508）」とされている。

また同書は、近代中国で発刊された「主要西洋医薬雑誌の名称、編者、発行地、創刊年月、変動情況表」を 13 頁にわたり掲載し、392 誌を収録している。その最初は、1880 年の『西医新報』（広州、編者はアメリカ人）、2 番目は、1886 年『医学報』（広州）、3 番目は 1887 年 3 月の『博医会報』（上海）、4 番目は 1906 年 1 月の『衛生学報』（上海）、5 番目が 1906 年の『医学知新報』（広州、編者はドイツ人）、そして 6 番目に 1907 年 2 月の『医薬学報』（日本・千葉：千葉医学専門学校）、7 番目に 1907 年 6 月の『衛生世界』（日本・金沢：金沢医学専門学校）が挙げられていた（ｐ510）。

つまり、1880 年に中国人による西洋医学の雑誌第一号が出されてはいたが、留学生が留学先で出した最初は、千葉医専の『医薬学報』であった。同誌が近代中国で発行された 400 余誌のうち、最も早期に発刊されたものであることを考えると、千葉医専留学生たちが、中国近代医学にもたらした影響は、やはり大きいものがあったと見て良いだろう。

２）中華医学会

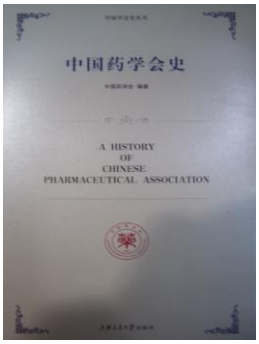
1915 年 2 月に設立された学会で、「医家の交誼を強固にし、医徳医権を尊重し、医学衛生を普及し、華洋医学界を連結する」を旨とした。当初の会員は 232 名だったが、各地に支

部を持ち、中国医学界を代表する団体に成長し、1930 年代には会員数 2800 名にも及んだ。学術活動、医学書の出版、公共衛生と予防医学の推進、高いレベルの医務人員の養成など、近代医学の発展に大きな貢献した。1937 年には、千葉ＯＢの金宝善が会長に就いている (54)。

３）中華民国医薬学会

1915 年８月（一説には５月）に、日本で医薬学を学んだ帰国留学生と国内の医薬専門家が組織した団体。会長は、金沢医専出身の湯爾和で、創始者の一人に、侯毓汶（侯希民）がいる。ここに加盟した著名医家の多くは、中華医学会会員にもなっていたとされる (55)。

４）中国薬学会（中華薬学会）



現在の中国で最大かつ最古の薬学研究団体は「中国薬学会」である。この学会は 1907 年に創設された「中華薬学会」を歴史的起源としており、2008 年には、学会創設百年を記念し、『中国薬学会史』を発行した（上海交通大学出版社）。今や８万人の会員を擁する同学会も創立時は 27 名しかいなかった (56) とされるが、創設地は日本の東京であり、初期メンバーには千葉医学専門学校薬学科の留学生も含まれていた。

以下、長い引用になるが、関連箇所を紹介しておく。

・・・

早い時期に日本留学をした中国薬学生は、日本薬学会に参加して、会員になった。1907 年に留日中国学生が多くなった後、こうした外部環境の影響と薬学の人材を集中することによって、中国薬学界最初の学術団体は「時代の要求に応じて現れた」のである。

第二節　日本・東京での中華薬学会創立　（ｐ6～7）

日本に早い段階で留学した薬学界の精鋭たちは、中国薬学の発展のため、一緒に行動し、中国薬学史上最初の学術団体を作ろうとした。1907 年冬（見城注：1908 年説もあるとのこと）、留日薬学生であった王煥文、伍晟、曽貞、胡晴崖、鮑栄等が発起し、中国薬学学術団体の設立が決定した。成立大会は東京水道橋明楽園で挙行され、**東京及び千葉で学習と研究をする薬学生が集まった。**その中心は、王煥文、**華鴻**、徐錫驥、趙橘黄、伍晟、王程之、鮑栄、史金塘、仲鳳鳴、金体選、胡晴崖、等であった。新しく成立した中国最初の薬学学術団体は「中華薬学会」と命名された。清末の中国で続々と設立した中国医薬学術団体中で、地方性を持った団体としては「上海医務総会」（1906 年）や**留日学生が設立した医薬団体である千葉の「中国医薬学会」（1906 年）**などがあるが、初めから全国性をもって出現し、成立当初から薬学発展に務め、今日に至る自然科学学術団体の中では、まさに「中華薬学会」が最も初めに創られ、また最も長く継続している団体となった。（下略）

第三節　中華薬学会第一期年次会　（ｐ7～8）

中華薬学会成立後、1909 年（見城：1908 年説もあるとのこと）、水道橋で第一期年次会が開かれた。そこには 20 名の代表が参加し、またそれ以外の 7 名は都合がつかなかった。これら 27 名は、江西、江蘇、浙江、広東、四川、山東、湖南、河南の８省出身で、東京帝国大学薬学科、東京薬学専門学校、明治薬学専門学校、九州医科大学薬学科、**千葉医科大学**（見城注：当時はまだ「医学専門学校」）、長崎医科大学薬学科、熊本医科大学薬学科の７つの薬学学校、すなわち当時の日本の主だった薬学関係学校に所属していた。（中略）

1911 年、中国で驚天動地の変化が発生した。孫文が指導する辛亥革命が満清政府を打倒し、中国の封建社会制度を終わらせようとしたのである。中国国内の革命形勢の盛り上がりを受け、当時の在日薬学留学生は続々帰国し、国家のため、社会的服務のため、学んだ知識を活かす準備をした。また初期段階の中華薬学会も、速やかに活動の拠点を中国に移すことができた。つまり、この学会の設立後の新しいページを開くことになったのである。

・・・

筆者が確認できた千葉医専生は、華鴻【30】と薛宜琪【31】の二名のみである。

その後、1917 年に東京で「留日中華薬学会」が組織されている。中国国内の政治体制が安定しない状態が続いていたため、1912 年の第二期大会以降、「中華薬学会」の大会は開かれていなかったので、東京での開催を第三期年次会（1917 年）と数えることにしたという。

この第三期年次会で、千葉医専の劉文超（劉歩青）【146】が副会長に推されている。劉文超は、上海で 1926 年開かれた第五期年次会、1927 年の第六期年次会で幹事に、1935 年第七期年次会、1936 年、第八期年次会でそれぞれ理事に就いた。また、繙経【117】が、第九・十期年次会（1942・43 年）で理事に、十一期年次会（1947 年）で監事になっている（ｐ11～27）。

以上、千葉医専・医科大の帰国留学生たちは、医薬薬学団体の創始にも関わり、何名かは役職も務め、中国医薬界の発展に力を尽くしたことを、学会の「正史」からも窺うことができるのである。

おわりに

日露戦争後の中国留学生急増に対応するため、日本の５つの官立学校が中国側の経費負担による派遣留学生を、1907 年から 1922 年までの 15 年間にわたり、受け入れる「特約」を結んだ。そして、千葉医学専門学校は、医薬修学を希望する若者の指定校になったため、毎年 10 名余りの留学生を受け入れてきた（[58]）。

「中国が自身で西洋医を育てたのは、清末の『実事白話報』（北京）によれば、王若儼、方石珊、侯希民など留学した医科進士、医科挙人、徐蔚文などの歯科進士との記載があり、彼らが中国最初の西洋医だったと思われる。方石珊氏はのちに北京に首善医院を設立し、新中国建国後は社会活動に参加した。」

この文章は、現代中国におけるある「医学史」叙述の一節である（[59]）。ここで最初の西洋医（原文：「中国第一代西医」）として名前が挙げられている王、方、侯はみな千葉医専の卒業生である。王若儼【8】は本文で登場しなかったが、1904 年入学、08 年卒業。江西省立医学専門学校校長などを歴任した人物（[60]）である。

卒業帰国後の彼らが、中国における近代医学（西洋医学）発展の先導役を務め、さらに辛亥革命後の近代中国や戦後の中華人民共和国を作りあげるため、奮闘努力し、しかるべき評価も与えられていること、留学を媒介にした「知」の友好提携の歴史があったことは、近代日中関係の中で特筆すべき事項であろう。本稿が最も強調したい点はここである。

しかしながら、一方で、近代日中関係史は、日本が中国に軍事的侵攻を行うなど様々な要素が絡まり合い、評価基軸を定め難いこともまた事実である。最後になったが、この点を簡単に触れておきたい。

旧稿で、筆者は、1938 年夏、日本軍が実質的に支配していた北京で、日中の学者が集い、

両国の文化的提携を強固にすることを目的とした「東亜文化協議会」を発足させたこと、その医学部会の役職者として、千葉ＯＢの呉祥鳳、侯毓汶（侯希民）、方擎（方石珊）が就いたとされることを紹介した（[61]）。この３名が、中華民国医学界において、相当重要な地位を占めていたことは、本稿で見てきたところであり、少なくとも日中全面戦争が勃発するまでは、彼らが日本の医学者たちと交流を続けていたことは確認できる（[62]）。

また、日中が交戦中の 1941 年に、侯毓汶が千葉医科大学から博士号を授与されたとされ、一方、張錫祺が 1945 年 7 月、日本（それが千葉医科大学からによるものか否かは不明）が打診した博士号授与を拒否したとされていることを紹介してきた。両者の態度は交戦国日本との距離感をどのように定めようとしたのかを示す史料の一つではある。

しかしながら、抗日戦争勝利後の新中国において、侯、また方や呉がしかるべき地位を得て、活躍していた事情を考えると、日本軍の侵略行動について、彼らは抵抗姿勢を貫き、それが戦後の評価に繋がっていったと考えるのが妥当と思われる（本稿における方石珊・呉祥鳳の評伝的叙述を再確認して欲しい）。

こうしたデリケートな事情が背景にあるためか、元留学生たちが、戦後に「日本医学界」あるいは「千葉医専」との関連や思い出を記していることは、趙師震の文章などごく一部を除き（[63]）、あまり見出すことができない。致し方ないところであろうか。

そこで、最後に、九州大学医学部を卒業後、文学・歴史学など様々な分野で活躍し、また千葉県市川に 1928～37 年の十年余り住んでいた郭沫若が、戦後訪日した際に発した言葉を紹介し、戦前期医薬留学生が戦後に抱いた想いの一端を窺わせる素材としておきたい。

すなわち、1955 年 12 月、郭沫若（当時は中国科学院初代院長）は、国交が未回復の日本に、民間交流開始の第一陣とされる「中国科学代表団」の団長として来日した。そして各地を表敬訪問したが、12 月 5 日には、千葉県市川の旧居および千葉大学医学部を訪れている。郭は医学部を訪れた際に、「日本の学者たちが真面目に自分の研究をしているので、私たちも大きな励ましを受け、さらに頑張らなければならないと思う」とのコメントを残したという（[64]）。また、「医道乃仁術　仁者必有寿　我亦曽学医　未仁心自咎（医道はすなわち仁術であり、仁は必ず幸せを与える。私もまたかつて医を学んでいたが、いまだ仁心でないため、自身を咎めている）」という詩も残している（[65]）。

筆者はこれを、戦前の日本で学び、生活し、また抗日戦争を戦った郭が、その経験を踏まえた上で、日中の学術文化交流（留学を含む）の大切さを示したきわめて重厚でかつ希望を含んだ言葉と理解し、戦前期医薬留学生の帰国後の活動やその歴史的評価を紹介した小稿の結びとしたい。

【補遺】

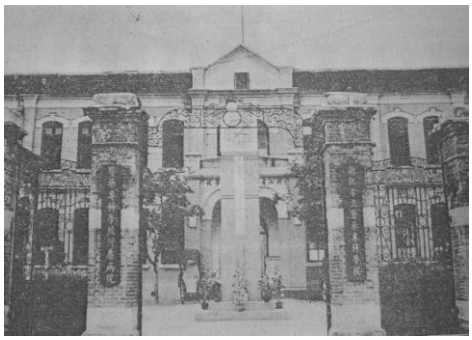
見城「明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向」『国際教育』２号（2009 年３月）脱稿後の新事実補足および誤記訂正

１）千葉医専・医科大学　留学生名簿への追加記載

旧稿発表後、中国の２つの医学校の教員名簿類を入手することを得た。また、千葉医科大学薬学専門部が 1923 年から発行していた『千葉薬学誌』の存在を知り得た（66）。

それら３点によって、旧稿では「不明」と処理した人物の履歴などが一部明らかになったので、旧稿に掲げた留学生在籍者一覧の補足あるいは修正をしたい。

①　浙江省立医薬専門学校に勤務した千葉ＯＢの名前ほか



浙江省立医薬専門学校（現浙江大学医学部）には、千葉医専・医大関係者が相当数務めていたことを旧稿で紹介した。すなわち、1912 年の創設から 1930 年代にかけて、千葉関係者が４名校長に就いていた事、また 1935 年３月の外務省報告中に、同校の医科専門担当教員 17 名中 10 名が、また薬科では専門１名、日本語教員１名（医科教授が兼任）が千葉ＯＢであると記されていた（67）事などである。

上海市上海図書館所蔵の『浙江省立医薬専科学校一覧』（1937 年６月発行）には、発行時点までに勤務していた教員の一覧が載せられている（左上に掲げた校舎写真も同書所収）。それによって、千葉医専・医大ＯＢの勤務年次などがより明確になったので、ここに補足しておく。

まず 1937 年６月段階で、在職教員中に千葉関係者は８名いた。それぞれの赴任年月、専門、年齢のデータは、以下である。

校長・王佶（吉人）【198】（1926 年９月～、外科、41 歳）、教務主任・余継敏（徳蓀）【87】（1922 年８月～、生物化学、公共衛生学、47 歳）、附属医院院長・孫遵行（道夫）【168】（1927 年４月～、眼科、日本語、37 歳）、丁求真（任生）【49】（1915 年８月～、公共衛生、50 歳）、黄曾燮（間羹）【148】（1933 年８月～、小児科・内科、41 歳）、姚爾明（叔高）【212】（1937 年２月～、外科、38 歳）、章志青【226】（1935 年２月～、生理学・薬理学、31 歳）、鄭万育【229】（1936 年８月、産婦人科、32 歳）。

筆者が旧稿で作成した名簿において、黄曾燮の経歴は「杭州・長生医院」、鄭万育は「広西省立医学院産科教授」、姚爾明は「陝西省立医院外科処長」のみの記載に留まっていたが、この史料によって、「浙江省立医薬専門学校教授」の肩書が加わることになる。

歴代の校長に就いた千葉ＯＢの名前と年次は以下の通りである。

４代校長・李定（愼微）【45】（1922 年７月～1925 年２月）（68）、６代校長・丁求真（任生）【49】（1926 年３月～1927 年８月）、７代校長・朱其輝（内光）【61】（1927 年８月～1933 年

1 月）、８代校長（再任）・丁求真（1933 年 1 月～1934 年 7 月）、10 代校長・王佶（1935 年 2 月～）。

また、同校に勤務した経験を持つ千葉ＯＢの名前と年次は以下の通りである。

張修敏【18】（1923 年 10 月～1929 年 7 月：37 年段階では故人）、華鴻【30】（1913 年 8 月～1923 年 2 月：37 年段階では故人）、李定【45】（1924 年 4 月～1934 年 7 月）、朱其輝（1926 年 8 月～1933 年 1 月）、毛汶泉（済美）【65】（1916 年 1 月～1929 年 7 月）、謝瑜【74】（1916 年 9 月～1925 年 1 月：37 年段階では故人）、陳宏声【98】（1931 年 8 月～1934 年 7 月）、朱章貴（仲青）（[69]）【120】（1927 年 8 月～1935 年 7 月）、朱国斌（錫候）【166】（1923 年 9 月～1927 年 7 月）、林鏡平（伯平）【185】（1925 年 8 月～1926 年 7 月、1934 年 8 月～1936 年 7 月）、張鎔【187】（1933 年 9 月～1934 年 8 月）、王琨【232】（1933 年 12 月～1934 年 1 月）、邵岩（爾瞻）【233】（1935 年 2 月～1935 年 7 月）、徐伯鋆【236】（1932 年 9 月～1935 年 7 月）。

旧稿で作成した名簿において、張修敏の経歴は「北京市老君堂衛生材料廠、北京陸軍軍医学校」、毛汶泉は「上海天一味母廠廠医」、朱国斌は「義烏県中学校長」、王琨は、「広西省立医学院附属医院薬局主任、浙江民生製薬廠技師」、張鎔は「広西省立医学院教授」のみの記載に留まっていたが、彼らのキャリアにも、「浙江省立医薬専門学校」が加わる。

なお、この『浙江省立医薬専科学校一覧』には、同校の校歌が掲載されている。その歌詞（李樹化作詞）からは、中華民国の医薬界を担う若者たちに期待する内容が表現されているので、以下、参考として紹介しておきたい。

復興民族首在強身、我們研究医薬、我們提倡衛生、増進国民的康健、是我們的責任、這責任、重大、匪軽！。同学們！要求真学問、同学們！要有忠実心、発揚仁粛勤樸的精神、愛校愛国愛人。

（民族の復興はまず体を強くすることだ。我々は医薬を研究し、我々は衛生を提唱し、国民健康を増進する。これは我々の責任だ。この責任は重大で、軽くない。我々仲間は真の学問を要求し、我々仲間は忠実な心を必要とする。仁粛で勤朴な精神を発揚する。学校を愛し、国を愛し、人を愛する。）

人生苦痛要算疾病、我們研究医薬、我們提倡衛生、解除人民的痛苦、是我們的責任、這責任、重大、匪軽！。同学們！要求真学問、同学們！要有忠実心、期望福国利民的功成、同心合力前進。

（人生の苦痛は疾病だ。我々は医薬を研究し、我々は衛生を提唱し、人民の痛苦を解除する。これは我々の責任だ。この責任は重大で、軽くない。我々仲間は真の学問を要求する。我々は忠実な心を必要とする。幸せな国、民を利し、功成ることを希望する。心を一つにして力を合わせて、前進する）

② 上海東南医学院（医科大学）に勤務した千葉ＯＢの名前ほか

上海東南医学院は、1926 年に千葉医専関係者が中心になって創設した医学校である。初代校長は郭琦元【169】だった。同校は、1949 年、新中国の農村重視方針に従い、安徽省に移り、安徽医科大学と改称し、現在に至る。

この安徽医科大学が、「創立 80 周年事業」に関わる資料整理の過程で見つけたのが「東南医学院的主要留学生一覧表」である。この資料には、上海東南医学院教員中の日本留学経験者 58 名の名前が挙げられているが、うち 28 名が「千葉医科大学」出身者とされていた（[70]）。ここには、名前、出身校、卒業年の３つの記載があり、a. 旧稿掲載の名簿で、既に東南医学院教員と把握していた者９名、b. 東南医学院勤務の履歴を把握していなかった、あるいは「職業不詳」と処理したケース 14 名、c. 名簿中に該当者が見当たらないケース 5 名、の３タイプに分かれる。

a の９名については、卒業年次が筆者の調査（旧稿）と異なる２名についてのみ、「異説」として記録しておきたい。それは、湯蠡舟【197】（安徽医科大史料 1922 年：旧稿 1924 年）、邵岩（爾瞻）【233】（不明：1933 年）の２事例である。

b の 14 名は、以下の通りである。呉祥鳳（鳴岐）【64】（北平大学医学院ほか。安徽史料では「卒業年次不詳」：旧稿では 1915 年卒）劉之鋼（悟淑）【66】（上海・中江医院。安徽史料では「1914 年卒」：旧稿は 1915 年卒）、朱仲青（章貴）【120】（杭州医専教授。不詳：1919 年卒）。劉棨敬【137】（寧波・仁済医院。不詳：1919 年卒）。劉歩青（文超）【146】（新華薬行ほか。不詳：1918 年卒）。宗師涛【170】（浙江省で開業医。不詳：1922 年）。儲晋芳【173】（青島市立李村医院院長。1924 年：1923 年）。許枏（許棟材）【193】（南通医科大ほか。不詳：1924 年）、柯青【196】（福建・伯棠医院。1924 年：1924 年）。程世則【205】（湖北第一陸軍病院軍医。不詳：1925 年）。董徳新【206】（職業不明。不詳：1925 年）。周振治（周拯之）【211】（職業不明、1925 卒）。趙汝調（寿喬）【215】（上海・新亜薬廠廠長。1921 年卒：1924 年卒）、王烈【238】（千葉医科大副手。不詳：1934 年卒）。

ｃの５名だが、中国人は「字（あざな）」を異名として用いる（名前が２つある）ことが多いため、卒業年次や勤務地等から同定できる可能性が高い人物名を示しておく。

まず、「周公威。卒業年次不詳」は、旧稿名簿で「中退者（1913 年入学、1916 年中退）」として処理していた周成龍【111】と同一人物である。日本側資料（[71]）では「中退」扱いになっているが、いずれにしても、千葉医専関係者として職を得ていたようである。一方、「繆澄中。1922 年卒」は繆晃【119】（南京で開業医。1920 年卒）（[72]）、「黄徳文。卒業年次不詳」は黄裕綸【219】（南通医学院教授、1925 卒）だろうと思われる。

絞り込みができないのは、ともに卒業年次不詳の「張丹城」と「董徳文」である。張については、浙江・江蘇出身者、あるいは上海周辺で働いていたＯＢ中に、張姓を持った人が複数いるので、そのいずれかだろうと思われる（想定される名前は略）。

董についてだが、旧稿作成の名簿上で同じ姓を持ったＯＢは、先に挙げた董徳新【206】一人である。徳新と徳文は似ているので、兄弟という可能性、はたまた二重記載（誤記）の可

能性なども考えるが、不詳である。

③　『千葉薬学会誌』に基づく入学者の新規追加など

千葉医学専門学校は、「大学令」により、1922 年に千葉医科大学となった。それと同時に千葉医専薬学科は、千葉医科大学薬学専門部となり、その「独立の機関雑誌」として 1923 年 12 月から発刊されたのが『千葉薬学誌』である（[73]）。千葉県立中央図書館に所蔵されている同誌（1936 年発刊の 18 号まで）から確認できた留学生の情報には、旧稿とは異なるものが含まれており、それを補足しておきたい。

旧稿名簿において、蔡然捷【234】と蔡則楷【235】について、ともに「1929 年薬学専門部入学、1932 年卒業」という事情しか分らなかったが、「出身省は不明ながら中国出身」と処理した。しかしながら、『千葉薬学誌』によれば、出身は両者とも「台湾」、入学年次は「1928 年」とされている。さらに、旧稿で「1930 年薬入学、1933 年卒業」とした李麟国【240】、「1936 年薬入学、1939 年卒業」とした洪木火【248】も、「中国」ではなく「台湾」出身であった。

また 1927 年に薬学専門部に入学した鄭泰行【228】についても、出身地を「中国」と処理したが、「朝鮮」出身であり、1930 年卒業後、「平壌道立慈恵病院薬局」に勤務していることが分かった。一方、張斗南【201】（中国・陝西省出身）の卒業後は「不明」としたが、「大阪・塩野義（シオノギ）商店新薬部」さらに「塩野義上海支店長」の職歴を持っていた。

旧稿の名簿では、名前を挙げ得なかった人物も同誌の入学者一覧にあった。すなわち、薬学専門部 1928 年度入学生の中に、「台湾」籍を持った李徳材、林敬栄、1936 年入学者に「台湾」籍の蘇友玄、さらに 1935 年度入学者として「満州国・奉天一中」出身の「馮学異」の名が載せられている。これら４名は薬学部同窓会名簿等で名前を確認できないので、中退した可能性が高い。しかし、「入学」とされているのは事実なので、旧稿で作成した入学者名簿（266 名掲載）に新たに追加することとする。ただし、入学年次に従って追加すると、表の通し番号が大きく変動するので、ここでは、李徳材を【267】番、林敬栄は【268】。1936 年入学の蘇友玄は【269】。満州奉天出身の馮学異を【270】としておきたい。

また、安徽医科大提供の「東南医学院教員一覧」に載っているものの、入学・卒業年次不明、出身省不明の「董徳文」については、そのデータを尊重し、東南医学院教員になった未知のＯＢとして名簿の【271】に追加しておきたい。

最後に、江澐【221】についても簡単な補足をしておく。旧稿で、江の履歴は「1925 年薬学専門部卒業」のみとした。それはそれで正しいのだが、その年に千葉医科大学に進学していることが分かった。しかし、卒業した記録はないので、医科大に入学後、どこかの時期に中退したものと思われる。

④　卒業後の職業経歴にかかる新事実

千葉医専初期の留学生である侯毓汶【7】と方擎【20】については、本稿において、多くを紹介した。旧稿では、両者を「軍医」「勤務医」あるいは「行政職」経験を持つ人物と理解

していたが、侯が「保定医学専科学校副校長」等を、方が「北京大学医学院公共衛生系主任」等の経歴も持っていたことが分かり、「大学教官」経験者の列に加えたい。

また汪與準【11】、は「浙江医学専門学校教員」、「南京軍政部技師」の略歴のほか、「北京内務部」勤務、すなわち「政府・官庁」の経験も持ち、王麟書【42】は、「天津市衛生技正」のほか、「北京陸軍部軍医司」、すなわち「軍医」に就いていたことも分かった（[74]）。さらに、卒業後の履歴は「不明」であった張斗南【201】について、「大阪・塩野義（シオノギ）商店新薬部」、また「塩野義上海支店長」の経歴が明らかになった（[75]）。

２）「千葉医専・医科大学における在籍留学生数（1899～1945 年）」の修正

旧稿のｐ23 に、節題の表を掲げ、出身地別、医薬の別、入学、卒業（卒業率）、中退の人数を一覧にして示した。しかし、数字の誤記入がかなり多かったことが判明した。本来は、訂正した表を示すべきであるが、一方、前節「③『千葉薬学会誌』に基づく入学者の新規追加」で見たように、本稿においても、出身地の訂正や新規追加者が現れた。

旧稿掲載の表の訂正版に加え、新事実を加えた新たな表を示すこと、すなわち、表を２つ掲げるのは煩瑣の感があるので、訂正版（[76]）は割愛し、改訂版となる後者のみを以下に示すこととする。ご諒恕いただきたい。

【改訂版】千葉医専・千葉医科大における在籍留学生数（1899～1945 年）

地域名	医薬別	入学者	卒業者	卒業率	中退者	中・卒不明
中国	医学	165	116	70%	46	3
	薬学	59	50	85%	9	0
	計	224	166	74%	55	3
「満州」	医学	0	0	0%	0	0
	薬学	1	0	0%	1	0
	計	1	0	0%	1	0
台湾	医学	6	2	33%	4	0
	薬学	10	7	70%	3	0
	計	16	9	56%	7	0
朝鮮	医学	27	19	70％	8	0
	薬学	3	1	33%	2	0
	計	30	20	66%	10	0
計	医学計	198	137	69%	58	3
	薬学計	73	58	79%	15	0
	総計	271	195	72%	73	3

３）「千葉医専・医科大学留学生の卒業後の職業」の修正

旧稿ｐ36 に、［表 14］として節題の表を挙げた。しかし、本稿補遺の「１）千葉医専・医科大学　留学生名簿への追加記載」によって、「大学教官」を中心に大幅な増加を見たので、ここに改訂版を示すこととする。

［表 14］千葉医専・医科大学留学生の卒業後の職業

旧稿掲載版

種別	人数	比率
教官	45	24%
開業医	45	24%
勤務医	40	21%
軍医	36	19%
会社･工場	9	5%
政府･官庁	9	5%
諸学校	3	2%
総計	187	100%

改訂新版

種別	人数	比率
教官	67	32%
開業医（薬局自営）	45	21%
勤務医（病院勤務）	41	19%
軍医	37	17%
会社・工場	10	5%
政府・官庁	10	5%
諸学校	3	1%
総計	213	100%

前回のまとめに比し、医学校教官が大幅に増えたのは、浙江医薬専門学校および上海東南医学院の教員名簿を得たことに拠る。

なお、本表は、全留学生を集計したものであるが、朝鮮・台湾出身者で軍医および医学校教官になった人はいない。一方、朝鮮出身者の開業医が 8 名、勤務医が 9 名いるので、この数を減じ（総計を 196 名とし）、中国帰国者における百分比として改めて算出すると、医学校教官の比率が 34%、開業医が 19%、軍医が 19%、勤務医が 16%となり、中国留学生で医学校教官に就いた比率は一層高くなることが確認できるであろう。

（なお、旧稿では分類を「開業医」「勤務医」としたが、薬学科出身者も含まれるので、前者は「開業医（薬局自営）」、後者は「勤務医（病院勤務）」という表現に替えておきたい。）

４）「中国留学生の年次別入学者数」の訂正

先に見たように、中国出身者と想定していた人物が、「台湾」出身であることが明確になった。そのため旧稿ｐ24 で示した「表５　千葉医科大学　中国留学生年次別入学者数（1923～1945）」の表を訂正する必要が生じた。

すなわち、1927 年入学者は 2 名から 1 名へ、1929 年は 4 名から 2 名へ、1930 年は 5 名から 4 名へ、1936 年は 5 名から 4 名へと、訂正したい。

また、「表９　千葉医科大学　年次別入学者＆卒業率（1923～1943）」（ｐ26）についても、1928 年に台湾籍２名の入学が判明したため、「入学者 4 名、卒業者 3 名、卒業率 75%」から「入学者 6 名、卒業者 3 名、卒業率 50%」に変わる。また 1935 年の「入学者 1 名、卒業

者１名、卒業率 100％」は、「満州」学生の入学により、「入学者２名、卒業者１名、卒業率 50％」に、1936 年は台湾学生の入学により、「入学者５名、卒業者４名、卒業率 80％」が、「入学者６名、卒業者４名、卒業率 67％」に訂正変更したい。

なお、前者に連動して、「表７　千葉医科大学留学生在籍者数の推移（1923～1945)」（ｐ25）の中国・韓国・台湾の学生数内訳が異なってくるが、このグラフでは全体の総計数のみ数字を挙げ、３地域それぞれの数値は出していないので、煩瑣を避け、ここで訂正した数値を示すことはしない。

５）「全在学生の卒業後の職業」表中の誤記訂正

旧稿ｐ37 で示した「千葉医専・医科大卒業生の進路」の表の種別の一つが「軍医・薬劇官」になっているが、後者は誤りで、正しくは「軍医・薬剤官」である。

６）『中国留学生大辞典』に収録されている千葉医専卒業生の追加

旧稿で、1996 年に南京大学出版社から発刊された『中国留学生大辞典』に収録されている千葉医専関係者は、方声洞、王頴、張錫祺の３名であると述べた（旧稿 P52)。しかし、本稿をまとめる過程で、改めて同書をチェックしたところ、金宝善が「東京帝国大学留学生」として掲載されていることが判明した。金宝善は千葉医専を出た後、東大に進んだので、千葉時代は割愛されてしまったと見える。

よって、『中国留学生大辞典』には「千葉医専・医科大ＯＢ４名が掲載されている」と訂正したい。

---

1 日本学生支援機構（JASSO）のＨＰ参照（http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data09.html)。

2 川島真「日本占領期華北における留日学生をめぐる動向」(大里浩秋・孫安石編『留学生派遣 から見た近代日中関係史』お茶の水書房、2009 年、p213)。

3 『国際教育』第２号、2009 年３月。なお、同稿は、千葉大学国際教育センターのＨＰ（ライブラリー：http://www.international.chiba-u.ac.jp/pdf/library_12-2.pdf）から、自由に閲覧できる。

4 千葉大学房総研究会と千葉日報社が提携して発刊している「千葉学ブックレット」の一冊として、2009 年 12 月に千葉日報社から発刊された。

5 本稿で紹介する人物は、旧稿で整理した 220 余名の中、政府行政職や医学校教員として社会的な影響を持った事が予想される人物に目星を付け、検索し、見出したものである。つまり、220 余名全員の資料渉猟に努めたわけではない。よって、たとえば「開業医」になった人物、さらには「中退」した人物の中に、歴史的に重要な役割を果たした人物が含まれている可能性もゼロでない。

6 侯の卒業年次を『中国人名大詞典（当代人物巻)』(上海辞書出版社、1992 年）は、1905 年としている。しかし、『千葉医学専門学校一覧』など学校側の史料は、1904 年入学、08 年卒業としているので、本稿もそれに準じた。なお、それ以外の履歴叙述は、同詞典を主に参考とした。

なお、侯毓汶の青年時の写真は、千葉大学医学部ゐのはな同窓会が所蔵している『千葉医学専門学校卒業アルバム』に掲載されたものを転載した。卒業アルバムはすべての年次のものが残っている訳ではないが、本稿で取り上げる卒業生の学生時代のものが確認できた場合は、適

宜掲載する。

[7] 現在の河南省、山東省の一部で、国共内戦さなかの 1949 年 8 月に、中国共産党が華北平原に新設した省。1952 年 11 月に廃止された。

[8] 前掲『中国人名大詞典（当代人物巻）』。

[9] 徐友春編『民国人物大辞典』1991 年。

[10] この記述は、賀宝善「唱導公共衛生的方石珊医生（公共衛生を唱導した医学者・方石珊）」（『書屋』2006 年第 11 期）による。一方、前掲『民国人物大辞典』には、戦時下の「東亜文化協議会評議員に選ばれた」との記述がある。見城旧稿でも、雑誌『同仁』誌上から、方が同会評議員に就いた旨の記述を確認している（ｐ44）。

[11] 前掲、賀宝善「唱導公共衛生的方石珊医生」。賀の論稿は、その生涯を概観することができる比較的長文の評伝で、前掲『中国人名大詞典（当代人物巻）』の叙述と併せ、本稿の参考とした。

[12] 王頴「憶声洞（方声洞の想い出）」p619（文史資料研究委員会編『辛亥革命回憶録』第１集、中華人民政治協商会議全国委員会、1961 年 10 月）。

[13] この項の叙述は、范啓龍「方声洞」（『民国人物伝』第４巻、1984 年、中国社会科学院近代史研究所）に多くを拠った。千葉医専・荻生校長の談話は、曽永玲「為国損躯的烈士方声洞」p351（趙矢元編『中国近代愛国百人伝』1985）に記載がある。しかし、千葉医専側（日本側）の資料から、それを裏付けるものは、現在のところ確認できていない。

[14] 方声洞の長男・賢旭は、辛亥革命 70 周年にあたる 1981 年に、「民革中央候補委員」の肩書で「黄花英烈　光照千秋―紀念先父方声洞殉国七十周年」『人民日報』1981 年 3 月 29 日付け、「辛亥英豪　万古留芳―紀念辛亥革命七十周年」『同』同年 10 月 12 日付けに、父への想いを寄稿している。

[15] 前掲、王頴「憶声洞」p619。なお、千葉医学専門学校に正式に「入学」「卒業」した学生の名前を記録している『千葉医学専門学校一覧』から、王頴が「入学」した事実は確認できない。今日の研究生のような形での非正規生として指導を受けたのであろう。

[16] 前掲、王頴「憶声洞」p621。当時の千葉が、きわめて寂しい町であった事は、当時の教授である三輪徳寛の回顧にも見える。曰く、ある「夜、ひどい風で千葉の海岸は恐ろしいまでに打ち荒れ、家はガタンピシンと鳴り出した。すると、これにおじけづいた女房と女中は夜中にもかかわらず、東京に帰ると言い出し、仕度にとりかかった。僕は『俺は居るからお前達帰るなら帰れ』といふて、寝ていた。その頃の千葉は東京から来たものには恐ろしく淋しい処だった。東京育ちの女はみんな嫌がったものだ。それは僕の女房ばかりではなかった。千葉の教員で、東京生れの女房に土地柄を嫌われて、職を去った人も随分あった。又中には内証で東京に家庭を持って、千葉の本宅にはトランクだけを置いて、ごまかして居た人もあった」（加藤音佐次郎「三輪先生逸話集」p155、鈴木要吾編『三輪徳寛』三輪徳寛先生伝記編纂会、1938 年）。

[17] 以上の叙述は、前掲王頴「憶声洞」。また、周棉編『中国留学生大辞典』（南京大学出版社、1996 年）の「王頴」項も参照した。

[18] 尚明軒「喩培倫」『民国人物伝』第１巻、1978 年、中国社会科学院近代史研究所。

[19] 徐天民他編『北京医科大学人物志』、北京医科大学・中国協和医科大学聯合出版社、1997 年。また見城旧稿参照。

[20] 金を紹介する参考文献は、①「医務界の先輩　公共衛生学専門家　金宝善教授」（李向明ほか編『中国現代医学家伝略』科学技術文献出版社、1984 年）、②「公共衛生学家　金宝善」（崔月黎『中国当代医学家薈萃』吉林科学技術出版社、1987 年）、③高秋萍「金宝善」（中国社会科学

院近代史研究所編『民国人物伝』第８巻、中華書局、1996 年）等、表１で示したように相当数ある。ここでは、もっとも詳しい評伝である③を基本として、再構成した。

なお、魯迅の小説に金宝善が登場する逸話は、高秋萍「金宝善」に拠る。同稿はその作品を「辮子的風波」とするが、魯迅の作品にこの名前は見当たらない。一方、短編集『吶喊』（1923 年）に収められている作品に、「頭髪的故事」と「風波」（ともに 1920 年）がある。それぞれを検討したが、「頭髪的故事」の中の、以下の箇所の「数人の学生」の一人が、おそらく金宝善であったと見ているのではないかと思われる。

「宣統元年（1909 年）に、ぼくは郷里の中学の監学になった。（中略―魯迅は辮髪を切っていたため、同僚から警戒されていた。）ある日、数人の学生が突然ぼくのところへ来て、〈先生、ぼくたち、辮髪を切ります〉って言うんだ。ぼくは〈いかん〉と言った。〈辮髪のあるほうがいいですか。ないほうがいいですか？〉〈ないほうがいいが……〉〈では、なぜいかんとおっしゃるのですか？〉〈切るまでもあるまい。切らんほうが無難だ……しばらく待つがよい〉。彼らは何も言わずに、ムッとした顔で出ていった。だが結局切ってしまった。

さあ大変！　えらい騒ぎになった。ぼくは知らん顔をして、くりくり坊主がおおぜいの辮髪にまじって教室に出るのをほったらかしにしておいた」云々。

「髪の話」『竹内好訳　魯迅文集』１巻、ちくま文庫（1991 年）版、p74。

[21] 前掲『中国現代医学家伝略』1984 年。

[22] 中国衛生学史、植民地医学史研究に精力的に取り組んでいる飯島渉の研究（『ペストと近代中国』研文出版、2000 年、『マラリアと帝国』東京大学出版会、2005 年、『感染症の中国史』中公新書、2009 年）からは、金宝善などの医学者たちが挑んだ課題を知ることができる。

[23] 中国薬学会編著『中国薬学会史』上海交通大学出版社、2008 年、ｐ222。

[24] 李東華ほか編『羅宗洛校長与台大相関史料集』国立台湾大学出版中心、2007 年、 p57。

[25] 中国留学生の支援団体であった「日華学会」は、1923 年から、千葉県館山に、中国留学生専用の避暑施設を設置し、毎年多くの学生がそこで夏を過ごしたという（見城『近代の千葉と中国留学生たち』p55～56）。

[26] 張頴生「恩師張錫祺　―　一個真正高尚的人」『江淮文史』2008 年１期、p123。

[27] 「眼科専家　張錫祺」（崔月黎『中国当代医学家薈萃』吉林科学技術出版社、1987 年。張については、前掲した張頴生（安徽省委医院眼科）「恩師張錫祺」も詳しい叙述をしている。

なお、筆者は、旧稿で、1996 年発刊の『中国留学生大辞典』（南京大学出版社）に掲載されている千葉医専関係者の中に、張錫祺の名前があった事について、日本が東方文化事業の一環として設立した「上海自然科学研究所」の「細菌学科研究生」に張が就いていた経歴を持つことから、「本来的には現代中国においては評価されにくい経歴の持ち主ではなかったか」と述べた。

しかし、今回得た一連の史料から、張が戦時下も共産党と連携を取るなど、戦後に繋がる活動をしていたことなどが分かり、その意味では、やはり「現代中国で評価される」元留学生であることが確認できた。

[28] 郎紹君「鄧以蟄」『中国大百科全書　智慧蔵』（電子版）。

[29] 見城旧稿、ｐ18。

[30] 葉曙「初期台大的人与事」『閑話台大四十年』、安徽黄山書社、2008 年。引用部の逸話については、同書を一部紹介するサイト（http://www.exvv.com/mall/detail.jsp?proID=667452）からも見ることできる。

[31] 以上の叙述は、許培林「郭琦元事略」(『張家港日報』2009 年 10 月 21 日。「張家港史志網」http://www.zjgsz.com.cn/zjgsz/showinfo/showinfo.aspx?infoid=1ac6ab4b-fe95-417c-bf32-36ef6c38d19a&categoryNum=025003002　より引用）に拠った。

[32] 湯章城「力梃内遷建築内地―紀念東南医学院内遷安徽 60 周年記念」『安徽医科大学校報電子版　安徽医科大学第 777 期』2009 年 10 月 10 日。
(http://aydxb.cuepa.cn/show_more.php?doc_id=228379)

[33] 前掲、湯章城「力梃内遷建築内地」。

[34] 呉佩華・池子華「従戦地救護到社会服務」『民国档案』2009 年 1 月号。なお、湯は「戦後的医学教育」『救護通訊』第 19 期、1944 年 7 月、「日本投降以後的救護動向」『救護通訊』第 44 期、1945 年 8 月、などの論考を残している。

[35] 前掲、湯章城「力梃内遷建築内地」。

[36] 見城旧稿、 p 20。

[37] 見城旧稿、 p 20。

[38] 『浙江省立医薬専科学校一覧』1937 年 6 月、p252。

[39] 日本が敗戦し、新中国が成立した後、日本留学を経験した中国学生たちすべてが、大陸に戻った訳ではなく、台湾への移住を含め、様々な選択肢があったとされる（王雪萍「留日学生の選択―〈愛国〉と〈歴史〉」(劉傑・川島真編『1945 年の歴史認識』東京大学出版会、2009 年)。葉が台湾に渡った事情についても、個別事情と全体状況の中で、改めて考察する必要があるだろう。

[40] 陳夏紅「葉曙；台大医事話当年」『周刊　文化中国』2008 年 4 月 6 日号。

[41] 見城旧稿、 p 20。

[42] 鐘少華が編著した『早年留日者談日本』(山東画報出版社、1996 年）を、泉敬史・謝志宇が翻訳し、竹内実の監修を得て、2003 年、日本僑報社から刊行された。

[43] 前掲、見城『近代の千葉と中国留学生たち』、 p 60。

[44] 柳「中国の歯科事情について」『九州歯会誌』32-4、1978 年。

[45] 同仁会は 1902 年に日本の医学界が中国・朝鮮との提携協力を目的に発足させた団体である。中国現地に複数の病院を設置したり、留日医薬学生に対しては親睦会を開くなどを、関係性の構築に意を注いだ。中国の近代医学発展に貢献した部分もあるが、日中戦争以降は日本の文化的慰撫（文化工作）の一翼を担い、侵略の先棒を担いだとの見解もある（丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動―同仁会研究」『日本医史学雑誌』45-4、1999 年）また、鄭鉄涛・程之范編『中国医学通史　近代巻』(人民衛生出版社、2000 年）も、「同仁会は、日本が中国に対し、医薬を宣伝するとともに、経済・政治・文化の三種の力を持った侵略機構も兼ねていた」(p 505)との厳しい評価を与えている。見城旧稿 p41～44 も参照のこと。

[46] 見城旧稿 p43。

[47] 前掲、丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動④『日本医史学雑誌』46-4、2000 年、p 620～621。

[48] 「主要西医薬期刊的名称変動情況表」『中国医学通史』p511、512。

[49] 前掲『中国医学通史』p511。

[50] 土肥章司（1876～1960 年）は、1913 年金沢医専教授、33 年東京慈恵医大教授、日本皮膚科学会名誉会頭に就いた人物である。

[51] 千葉医専を 1910 年に卒業した方擎（方石珊）のこと。ここからは、千葉医専の先輩あるいは留日医学生の先輩として、両者が連携関係を持っていたことが窺える。

[52] 「趙師震」や「英漢医学辞典」の名前を、ネット検索（グーグル等）にかけると、中国や日本の図書館に所蔵されている同書各種版の存在を知ることができる。

[53] 前掲『民国人物大辞典』。

[54] 前掲『中国医学通史』p525～526。なお、崔月黎編『中国当代医学家薈萃』(吉林科学技術出版社、1987）の「公共衛生学家　金宝善」項目では、金が中華医学会会長を務めた時期を、1934 年から 41 年としている（ p 386)。

[55] 前掲『中国医学通史』p527。

[56] 中国薬学会編『中国薬学会史』上海交通大学出版社、2008 年、p1。

[57] さねとうけいしゅう『中国人留学史』(1960 年、くろしお出版）ｐ419 も、同会の発足を「1907 年」としている。よって、2 著が主張している 1907 年成立説を、筆者も現状では取りたい。見城旧稿、ｐ30 また注記 29 を参照。

[58] 見城旧稿ｐ13 参照。なお、馬伯英ほか著『中外医学文化交流史』（上海・文匯出版社、1993 年）は、日中医学交流史についての重要な先行研究著である。しかし、官立５学校による留学生受け入れについて、医学留学生は「仙台医学専門学校が毎年 10 名を受け入れることにした（ｐ447)」と記述するが、それは誤りで、千葉医学専門学校が正しい。同書を一部引用している丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動―同仁会研究④」(『日本医史学雑誌』46-4、2000、）は優れた論考であるが、ここについては、馬に従ったため、「仙台医専」と誤記されている（ｐ614)。

[59] 「西医的伝入」『明清両代的科学技術―前古医学、薬物学的総結与発展』ＨＰ「蘇州科普之窓」http://www.szkp.org.cn/kejishiliao/gdkj%A3%ADzy-01.htm。

[60] 見城旧稿、p16。

[61] 見城旧稿、p44。前掲『民国人物大辞典』の「方石珊」項に、彼が同会の評議員に就いた旨の記述があることは既述した通りである。

[62] 東京帝大医学部部長・永井潜は、1936 年８月に、山東省青島で開かれた同仁会大会に参加した際の見聞・交流記を書いている。その中には、北平大学医学院院長であり、「実に人柄の好い人」である呉祥鳳の自宅に招かれ「私達は民国の医家と心から打ち解け、また好遇を受けた事は実に愉快でした」。「青島で逢った国立山東大学の校医をしている鄧初君が、私が書画を好む事を聞かれ、自分の弟の鄧以蟄が北平清華大学の美学の教授をしているが、そこに是非行けといふ事でしたが、この鄧以蟄が午餐の席に列せられた」。また天津を訪問した時には、侯毓汶父子が出迎えた。「侯さんは千葉出身で、長く天津で衛生局長の様な位置に居た人でありました」「雨の降る中を何くれとお世話になり恐縮しました」、などの叙述がある。鄧兄弟を含め、少なくとも４名の千葉医専関係者が永井に対応しており、彼らが日中医学交流の前面に立っていた時期は確かにあったのである（永井「中華民国医界視察談」『同仁』1936 年 10 月号、p100、102)。

[63] 彼らが母国で発刊した医学書の一部、たとえば本文で紹介した趙師震『英漢医学辞典』の序文（1952 年）などには、「日本留学の成果」が示されているが、それはどちらかと少数派である。その意味で、注 42 で紹介した柳歩青が、晩年に戦時下日本での留学生活を回顧している文章は、たいへん貴重と言える。

[64] 「中国科学代表団訪問日本国会」『人民日報』1955 年 12 月８日付け。王建民『中日文化交流史』外語教学与研究出版社（北京)、2007 年、p164。

[65] 王維権ほか編『郭沫若年譜』、1955 年 12 月４日項（江蘇人民出版社、1983 年)。

[66] 同誌は千葉大学附属図書館に保管されておらず、筆者はその存在すら想定していなかったが、千葉県立中央図書館にその一部が収蔵されていることが後に判明した

[67] 見城旧稿、p38。

[68] 見城旧稿では、呂順長「清末における浙江省留日学生の帰国後の活躍」(『中国人日本留学史研究の現段階』2002 年）において、李定が「1922 年、盛在珩のあとの校長代理に任命され、翌年校長に就任した」を参照とし、李定は 1923 年に校長に就いたとしたが、同校側の史料では、1922 年から「校長」になったとされている。なお、旧稿で「３代」としたのは筆者による誤りで「４代」が正しい。

[69] 見城旧稿では、「朱仲青」が誰の異名か特定できず、「朱其輝と同一人物か」と書いた（p38)。学生の「姓名」に加え、「字」も掲載されている興亜院政務部発行『日本留学中華民国人吊調（6～10 版)』1940 年（東京都立中央図書館　実藤恵秀文庫）を参照したところ、「朱仲青」は、朱章貴と同一人物であることが確認できた。

[70] この旧教員一覧史料は、安徽医科大学がその縁を現在に活かそうと、2009 年に千葉大学医学部に交流を打診した際に、千葉大学側に提供したものである。両者協議の結果、2010 年中には、交流協定が締結される予定である。

[71] 前掲『日本留学中華民国人吊調』は、「中退者」までも掲載しているが、この一覧でも周成龍は、「中途退学者」とされている（同書ｐ307)。

[72] 前掲『日本留学中華民国人吊調』は、繆晃の字を「拯中」とする。「澄中」とイコールではな

いが、くずし字（行書体等）を活字に変える際、誤記するケースは少なくないので、本稿では同一人物と理解しておく。

[73] 『千葉薬学誌』第１号、1923 年 12 月、ｐ55。

[74] 『千葉薬学誌』第１号、ｐ5。

[75] 『千葉薬学誌』第 2 号、1924 年 12 月、ｐ72。同誌第 13 号、1930 年 7 月、ｐ114。

[76] 前掲、見城『近代の千葉と中国留学生たち』のｐ13 に、旧稿のケアレスミスを正した表を掲載している。参照されたい。